

2003925

絵本学会NEWS No.19

発行：絵本学会

発行日：2003年9月25日

編集：絵本学会事務局・広報委員会

事務局：〒305-8574茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学芸術学系絵本研究室内

Fax.029-853-2846

<http://ehongaku.musabi.ac.jp>

会長就任にあたって

第6回絵本学会大会報告

2003年度総会報告

絵本関係展覧会イベント インフォメーション

伝言板

専門委員会から

事務局から

絵本学会

会長就任にあたって 絵本学会第4代会長 今井良朗

絵本学会は、1997年5月の設立から7年目になります。会員数は約450名ではほぼ一定に推移してきました。この間、設立時からの会員が中心になって活動の成果も上がってきています。待望の学会機関誌『BOOK END』もプレ創刊号、創刊号が刊行されました。

会長就任にあたって、吉田新一初代会長、太田大八先生、三宅興子先生が述べられたことを『絵本学会ニュース』を通してあらためて振り返ってみました。それぞれの立場から絵本学への思いが述べられていますが、共通しているのは、絵本学の確立を目指す一方で、学会という堅苦しい枠組みにとらわれたアカデミックの固まりのような学会ではなく、社会や子どもの文化との接点を積極的につくりだしていくという視点でしょう。

3人の会長によって絵本学会の基礎もようやく固まってきたように思います。4代目の会長に就任するにあたり、まずこれまでの活動を着実に継続させていくことと、絵本学会を次の段階にどう発展させていくかが私に与えられた課題だと認識しています。

もともと絵本は、研究分野としては周縁に置かれてきました。それだけに絵本学の確立といつても容易なことではありません。他の表現領域に関する研究と比べて明らかに遅れていることも事実ですし、一段低く見られている現実は否めません。絵本学会は、こうした現状認識に基づいて、絵本の表現の分野により立脚した、絵本学という独自の学問領域の確立を目的に設立された組織に他なりません。まずこのことをあらためて認識する必要があるでしょう。

確かに絵本学会は、絵本の研究に関心のあるすべての人、研究者、教員、学芸員、司書、絵本編集者、絵本作家、デザイナー、地域で絵本を通じたさまざまな活動を展開されている方など実際に多彩な会員で構成されています。当然日常の活動の基盤も指向する方向性も必ずしも同じとはいえません。しかし、絵本に関するあらゆる活動を等価値に置き、様々な要求に応えそれを束ねコン

トロールしていくのが絵本学会の役割だとすれば、当初の目的を実現させていくのは難しいでしょう。

絵本学会の核はやはり絵本学研究であり、この核が強固なものになってはじめて、社会的な活動、子どもの文化への寄与も意味を持ち、有効な活動になっていくのだと思っています。絵本作家や編集者など絵本制作の現場からは、絵本に研究は無縁だとの声もあります。しかしこのことが日本の絵本を狭い枠組みの中に閉じこめてしまっている要因にもなっています。制作、出版、研究、それぞれが相互に刺激あってこそ豊かな絵本の環境が形成されるのではないかでしょうか。研究活動の活性化をはかることは、三宅前会長の方針でもありました。私もこの方針を継承していきたいと考えています。幸い、昨年ごろから「日本絵本史研究会」、「絵本表現研究会」、「昔話絵本の研究」など幾つかの研究会が会員を中心に活発な活動を展開しています。昨年度から学会による研究助成も制度化されました。第6回大会の研究発表では、日本絵本史研究会を中心に2件の共同研究発表もありました。今後このような活動が活発になっていけば、絵本研究のそぞろもひろがっていくはずです。この気運をどう高め、発展させていくかが、新しい体制のもとでの重要な課題になると思っています。

いま一つの課題は、フォーラムや地域活動、美術館活動など、様々な形で展開している絵本に関する活動と絵本学会の役割です。社会や子どもの文化との接点を積極的につくりだしていく視点も絵本学会の重要な姿勢です。現在太田先生が提唱されているWAVE構想にも積極的に関わっていくべきだと思っています。WAVE構想は、絵本を手がかりに人の輪をつくっていこうというもので、絵本に関係ある団体や組織が連携を深めようとの呼びかけです。社会的な活動をひろげていくためには、絵本に関係ある団体や組織、関連学会との連携は不可欠でしょう。一つの組織の活動には限りがあります。絵本学会としても他機関との連携を積極的に進めていくべきだと思っています。

個別の活動からひろがりのある活動に展開していくとき、絵本学会にも絵本の世界にも未来があると信じています。

第6回絵本学会大会を終えて

第6回絵本学会大会実行委員 竹迫祐子

2003年6月14日(土)～15日(日)、長野県の岡谷市で、「絵本と絵本美術館」を大会テーマに、絵本学会、岡谷市、イルフ童画館主催で、第6回絵本学会大会が開催されました。今日、日本の各地には30館を越える絵本美術館がありますが、この「絵本美術館」という存在は、日本に特徴的な存在で、欧米各国ではドイツのトライスドルフ絵本美術館や昨年11月に開館したアメリカのエリック・カール美術館を見るのみといわれています。このきわめて日本的な存在である「絵本美術館」とは何か?絵本の発展に、絵本美術館が果たす役割は何か、という問題意識が今岡谷大会のテーマに繋がっています。周知の通り、長野県は全国でも2番目に美術館が多い県ですが、絵本美術館も例外ではありません。日本の絵本美術館の半数近くが、長野県と八ヶ岳、清里、軽井沢等に集中しています。会場となった岡谷は、童画のパイオニア武井武雄が生まれたところ。1997年に武井武雄の業績を記念して、イルフ童画館が作られました。

また、今大会は、絵本学会の会員を中心に、地元岡谷の保育園長会、母親文庫連絡会や図書館関係者に市の職員を含め、岡谷市を上げて市民参加の実行委員会体制で取り組みました。多くの実行委員にとってはじめての体験故に、行き届かないところも多々で、実りある2日間の大会を終えることができました。

大会一日目は、岡谷市のカノラホールで開催されました。心配された雨が案の定、大会開始直前に降り出し、一時はどうなることかと関係者一同気を揉みましたが、参加者の出足に響くことなく、無事に大会をスタート。まず、はじめに、大会実行委員長林新一郎岡谷市長、絵本学会三宅興子会長の挨拶で幕を開けました。

基調講演は、絵本学会大会はじめての海外からのゲスト、イギリスの絵本画家、ブライアン・ワイルドスミスさんが登場。松下宏子さんの通訳で、大会テーマの「絵本と絵本美術館」と題して、自らの絵本作りや、絵本についての考え方を講演してくださいました。冒頭、両手を使っての絵のパフォーマンスに、会場はびっくり。なごやかな中に基調講演が行われました。

つづいて、「絵本と絵本美術館」をテーマに、日本を代表する4つの絵本美術館から、岩村和朗さん(いわむらかずお絵本の丘美術館・栃木県馬頭町)、大谷鞠音さん(安野光雅美術館館長・島根県津和野町)、二木六徳さん(イルフ童画館名誉館長・長野県岡谷市)、松本猛さん(安曇野ちひろ美術館・長野県北安曇郡松川村)が揃い、コーディネーターの香曾我部秀幸さんの進行で、シンポジウムが行われました。

大会一日目の盛り沢山のプログラムの締めくくりは、ホテル岡谷で開催された懇親会。この席には、ワイルドスミスさんや、伊豆のワイルドスミス絵本美術館の野村道子さん、シンポジウムに登壇してくださった絵本美術館の方々、林岡谷市長や三宅会長をはじめ、総勢70名が参加、楽しいひと時を楽しみました。席上、全国にその名が轟く岡谷太鼓の鼓楽響楽舎のみなさんが熱演。お腹の中まで響き渡る迫力のある演奏に、会場もしばし心を奪われました。

翌2日目は、会場を岡谷市生涯学習館・イルフプラザに移し、午前中は研究発表、ワークショップ、作品発表、午後は3つのラウンドテーブルが行われました。また、お昼には絵本学会第6回総会が

開催されました。

研究発表は、A B 2室に別れて15名による8テーマの発表が行われました。また、同時刻に「武井武雄デザインを学ぶモビール作り」と「武井武雄も学んだ「からくり玩具」を作ろう」という2つのワークショップも開催。岡谷市在住の子どもたちをはじめ、全国の親子がそれぞれ40人参加し、武井武雄の仕事からその感性を学びつつ、楽しい制作のひと時を過ごしました。中には、見ていても真剣そのものというまなざしの子どもたちに混じって、一緒に来たお父さんが夢中になって制作に取り組む姿も見られ、その熱気がほほえましく伝わってきました。

会場の中央スペースでは、エスカレーターを挟んで、作品発表とブックフェアが開かれました。作品発表は、絵本学会運営委員の笹本純さん、加持ゆかさんの司会進行で、9名の方々の発表が行われました。パネルに掲示された自作を前に、それぞれがコンセプトや苦労した点などを説明すると、会場からもさまざまな質問や意見が出され、和やかな中にも熱気のこもった作品発表が続きました。

一方のブックフェア会場には、今大会に参加された絵本作家の方たちの絵本が揃い、一角には作家によるサイン会場が設けられ、ブライアン・ワイルドスミス氏や岩村和朗さんが昨日に引き続き登場したのをはじめ、ラウンドテーブルに参加される浜田桂子さんや西内ミナミさんも参加。「今朝、新聞を見て飛んできました」という岡谷の方を含め、列を作る大勢のサイン希望者に対応していました。また、絵本の読み聞かせコーナーも開設され、多くの子どもたちの人気を集めっていました。

早めのお昼を済ませて、午後12時からは、絵本学会2003年度総会が持たれました。

午後からはいよいよ大会の最終プログラム、絵本作家研究「武井武雄の世界」、絵本と地域活動「絵本美術館を楽しむ」、絵本受容研究「絵本を結ぶ 絵本と遊ぶ」の3つのラウンドテーブルが持たれ、各会場とも積極的な論議が行われました。

本大会では、2日間に渡ってはじめて託児が行われましたが、これは岡谷市の保育園長会の全面的なご協力を得て実現したものです。実際にお子さんを預けて、大会に参加された方は9名でしたが、発表をする側にとっても、発表を聴く側にとっても、小さな子どもを持つ親にとっては深刻な問題である託児が、実現できたことは、大きな前進だったと思います。反面、当初予定をしていました長野県下の絵本美術館を回るオプショナルツアーが、最低実施人数に満たず、実現しませんでした。なおかつ、旅行会社の不手際で、ツアーの参加申し込みをされた方に中止のご連絡が行き届かず、ご迷惑をお掛けいたしましたこと、謹んでお詫び申し上げます。ツアーは実現しませんでしたが、この大会を機に、絵本美術館森のおうちを中心に作成された絵本美術館マップと付属の割引券を活用して、大会翌日、近隣の絵本美術館を回られた方もあったと聞いています。

大会前日から撤収に至るまで、延べ144名のボランティアの力を借りて、この大会が実現しましたことを、感謝をこめてご報告しておきます。

(文責:竹迫祐子)

基調講演「絵本と絵本美術館」

講師：ブライアン・ワイルドスミス

通訳：松下宏子（梅花女子大学・関西学院大学非常勤講師）

「人が何かものを創るときの基本には、<絵を描く>という行為があり、これは、多くの人々が魅力を感じる行為です。そして、この<絵を描く>ということが、様々な局面で、時に困難な状況を解決してくれることさえあります。」ワイルドスミスさんは、このように話はじめ、両手を同時に動かして、鏡に映ったもののように左右対称にりんごやライオン、またサインも両手で描くというパフォーマンスをして見せてくれました。

そして、その絵をみながら、こうしたパフォーマンスがきっかけとなって、教師たちからは問題児と思われていた少女が、実はとても利発な子どもであったということがわかったり、また、アパルトヘイトの南アフリカでは、黒人の聴衆を前に、黒人が白人に質問をしてはいけないという状況の中で、パフォーマンスをきっかけにして黒人たちからとてもたくさんの質問を受け、心を通わせたといったという経験が語られました。自らの体験から、ワイルドスミスさんは<絵を描く>ということが、ことばや環境が異なる人々が心を通わせるきっかけとなることを知ったと言います。

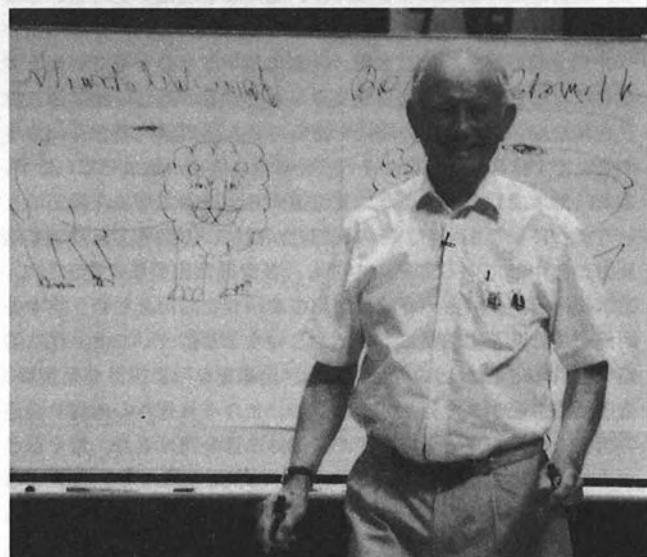
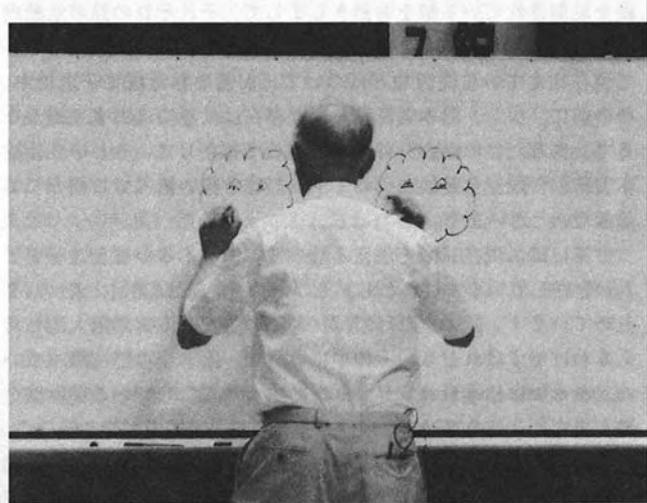
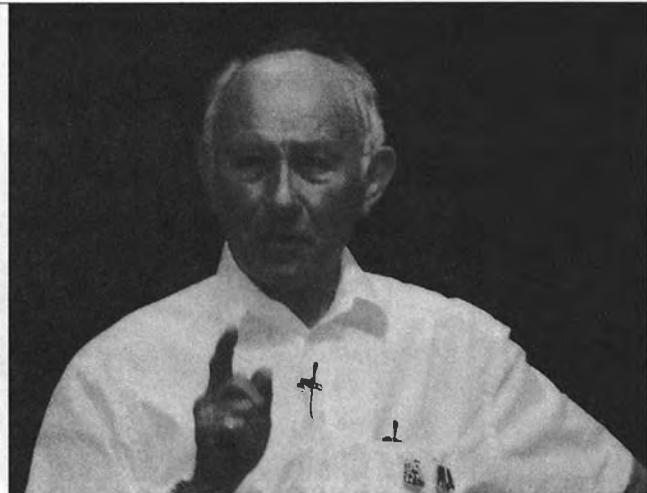
ワイルドスミスさんは、今まで、40年にわたり、絵本を創りつづけてきましたが、その間、子どもや絵本づくりに対する情熱は一度も薄れたことはないと言います。子どもたちはこれからの文明を築いていく大切な存在であるにも関わらず、時に私たちはその大切なことを忘がちです。子どもの心、特に幼い頃の心はどんなことでも書き込める白紙の本のようなものであり、私たちはそこに、愛やユーモア、思いやりの心、正義などについて書き込んでいく義務を持っていることを忘れてはならないと語ります。

ワイルドスミスさんにとっては、自由な絵を描くことと、絵本の絵を描くことに、クリエイティブな面での違いはありません。けれど、「絵本のための絵は、ある一定の時期に、教育的な考え方や物語を伝えていくこうとするもので、その内容に絵を合わせなければならない」ということがあります。つまり、教育的に必要なある一定の考え方を、クリエイティブで視覚的に面白く、子どもたちが興味を持ち得る絵にしていくことが大切で、このプロセスは自由な絵画を描く上では必要のない、独特のものなのです」と言います。

学生時代は化学者になりたいと考えていたワイルドスミスさんは、高校生のとき「本当に残りの人生に自分のやりたいことは何か」と自らに問いかけ、クリエイティブなことをしたいと思う自分をみつけます。こうして、美術の道に進みますが、美術大学を卒業後、兵役を経て、音楽や数学教師を勤めて、1957年からようやく本格的に絵を描くようになります。絵本の創作をはじめました。『ワイルドスミスのABC』『りすのはなし』『ラ・フォンテーヌ物語』など、これまでに手掛けた絵本は優に80冊を超えます。その中から代表的な作品を選び、スライドで紹介しながら、自らの絵本作りを解説しました。

この滞在期間中、いくつかの絵本美術館を訪れる機会があったワイルドスミス氏は、オリジナルと印刷された絵本との違いに改めてショックを受けたといいます。あまりにオリジナルと開きのある印刷物を、彼は「調子の狂ったピアノでモーツアルトを聴くようなもの」と語ります。今日、絵本美術館の存在する意義は、絵本の原画展とともに、そうして点からも大きなものがあると結びました。

（文責 柳川あづさ）



シンポジウム「絵本と絵本美術館」

シンポジスト：

二木六徳（イルフ童画館名誉館長）

大谷鞆音（安野光雅美術館館長）

岩村和朗（絵本作家、いわむらかずお絵本の丘美術館）

松本猛（安曇野ちひろ美術館）

コーディネーター：

香曾我部秀幸（絵本研究者、インディペンデント・キュレーター）

香 本日のシンポジウムのテーマは、今回の大会全体のテーマと同じく「絵本と絵本美術館」と題しております。今日は全国各地で極めて特色のある絵本美術館を設立され、ユニークな美術館活動を展開されている館をお招きしまして、それぞれの館の活動内容を紹介いただくとともに、絵本美術館が存在する意義、そして現在抱えている問題などについて、お話をいただく予定です。その前に、少し、絵本美術館という存在は世界にはあまり例がなくて、日本だけのかなり特殊事情として存在しているという、絵本美術館の成立と発展についてその経緯を描い摘んで紹介しておきたいと思います。

日本には、現在3800を超える数の博物館、あるいはミュージアムが存在していますけれども、その中で美術館は830館、5分の1を占めています。数の点だけでは、世界の名だたる美術館大国と言えるわけですけれども、その中にあって、絵本を専門に扱っている、あるいは絵本をコレクションの主な対象にしている美術館を数えますと、私のアンテナにはおよそ48の美術館が引掛りました。お手もとの資料「全国の子どもが行ける美術館、博物館、及び児童書専門店リストマップ」をご覧下さい。このリストを見ましても、美術館だけではありませんが、優に40を超える美術館があるのが分かります。

また、その設立経緯とか、設立年というものを見ていきますと、ほとんどが1990年代に設立をされている。一部に80年代に設立されたものがあり、先駆けであるちひろ美術館の場合は1977年の設立ですけれども、ほとんどが90年代に設立が集中しています。また、地域で見ますと、北は北海道から、南は九州、沖縄までということになりますが、その大部分が関東、中部地方、及び東北地方に集中している。その中でも、長野県と山梨県は突出して、絵本美術館が多いという結果が出てまいりました。なぜ、絵本美術館が長野県と山梨県に多いのかということについては、後の話題で触れるとして、とにかく、絵本を専門に扱う美術館は、全国規模で広がりを見せていますし、またそれぞれの地域で独自の活動を展開しているんですが、海外に目を向けると、驚くことについて数年までは、このような絵本を専門に扱う美術館というのは全く存在しなかった。ここ数年の間に、いくつかの絵本美術館が建ち上がったと言う情報は得ていますけれども…。日本における多数の絵本美術館の存在は、日本だけの特殊事情と言ってもよいかもしれません。だとすると、何故に、このような状況が生まれたのかという、そういう疑問がわいてくる訳ですけれども、その理由を探ると、いくつかのトピックが浮かんできます。

◆絵本美術館誕生の背景

まず最初に挙げられるのが、1960年代から70年代の絵本ブームというものがある。1950年代の例えば岩波の「子どもの本」だとか、福音館の「こどものとも」といった草創期を経て、日本の絵

本の世界は60年代から70年代にかけて、非常に活発に展開したわけです。現代の絵本を代表する絵本作家たちが、この時代に登場してきましたし、現在までにつづくロングセラーが多数生み出されてきました。この時代に日本の絵本は、視覚芸術表現として飛躍的に発展を遂げた。つまり、絵本の一枚一枚の画面が、絵画のタブロー作品に匹敵するような、そういう表現力を持った作品がぞくぞくと登場してきた。こういう事が挙げられるのではないかだろうか。

次に二番目に挙げられる事象ですが、創り手の側ではなく、絵本を受容する側の状況が変化した、これが挙げられるのではないかと思います。

つまり、絵本が絵という視覚表現と、言葉という受け取て言語表現の異なるふたつの要素が結合して、本という形態を持つ、そう言った表現メディアであるという提議は、私たちの間では、現在、共通の認識となっているんですけれども、このように物語や思想を伝達するための手段として、絵本が積極的に評価されるようになったのはそんなに古いことじゃなくて、日本では、やはり1970年代のことだったとおもいます。さらに70年代後半から80年代に掛けて、絵本を視覚芸術の一分野として位置付けようとする動き、つまり、美術研究の立場からの接近がこの時期に始まりました。絵本を造形美術のひとつの形態であると捉えて、視覚表現を分析するという評論であるとか、あるいは、絵本原画展の開催ということが試みられるという、そういう状況が生まれたのも、この時期なんです。

それからもうひとつ3番目に、これは最も重要、かつ直接的なエポックになったと考えられるのが、いわさきちひろ絵本美術館の誕生ではないだろうかと思います。みなさんもご存知の通り、いわさきちひろ絵本美術館は、1977年に設立されたものですけれども、開館当初より、いわさきちひろの作品を守るということに留まらずに、終始一貫して国内外の絵本作家の作品を収集する。加えて、絵本の歴史を構築して行くために必要な古くからの東西の貴重な出版資料の収集を継続して行ってきました。現在も継続して行っておられます。それから同時に、学芸スタッフを充実させて、地道な研究活動と普及活動を展開してこられました。こういった絵本美術館の世界的なさきがけとも言えるちひろ美術館が、経営的にも成功したということ。これにも、大いなる刺激を受けて80年代後半から90年代にかけて、全国に絵本美術館が続々と誕生してきて、ある種ブームが生じてきた、といつていい状況だったと考えができるわけです。しかし、ここで留意しなければならないのは、絵本を私たちが後世に守り伝えていかなければならぬ大切な文化財であると捉えて、絵本の原画を唯一無二の貴重な芸術作品として扱うという基本理念を、ちひろ美術館はずっと貫いておられるということだと思います。

以上、3つのエポックとなるべき事象を挙げたわけですけれども、これらの事象を通じて、主に1990年代に入って、絵本が子どもたちが生まれてはじめて触れる美術の世界であるということ。また、同時に大人とともに受容しうる芸術表現であるということが、一般に広く知られるようになっていった。その結果、絵本を専門に扱う美術館が、多数存在することが可能になったという風に考えることができます。

このような経緯を経て、現在の日本の絵本美術館の状況があるということを踏まえて、今日のシンポジウムの本題に入りたいと思います。

それでは、それぞれのパネリストの方から、それぞれの美術館のご紹介をしていただくことを兼ねまして、スライドを見ていた



香曾我部秀幸氏

だきながら、設立の経緯、立地、自然環境、地域の特性などについて、そして建築空間、展示空間の特色などについて、さらにコレクションの内容や規模、理念について、また常設展、企画展の内容、そのコンセプトについて、そして来館者の特徴、あるいは、地域でのその美術館が果たす役割などについても、お話をしていくことにしましょう。まず、イルフ童画館の二木さん、お願ひします。

◆イルフ童画館

二 今日午前中に、ここに居られるかなり大勢の方々がイルフ童画館に来てくださって、僕はご案内をしながら、お話をしたので、そういうことも含めながら館そのものについては、そういうところで語ったということになるかもしれません。

(以下スライド)

・武井武雄の学生時代の油彩画

東京美術学校の卒業製作の自画像ですが、後の作家の雰囲気が出ていない段階の作品で、後の武井武雄を彷彿とさせるという性格のものではないが、非常にものを良く見ておられる。筆のタッチもそうですし、武井さんの顔そのものも輪郭もですけれども、対象に迫る迫り方は、後の童画の雰囲気をもしかしたら内在しているかな、と思うんです。

・岡谷で最初に出会う武井作品

岡谷駅からイルフ童画館へと歩く道の様々なところに、武井さんの作品が組み込まれているんです。例えば街路灯であるとか、銀行の壁であるとか、道路のそれぞれに、もうお馴染みになりましたラムラム王ですね、そういうものが配置されていて、5分歩くとあの可愛いイルフ童画館に着くということになります。

・イルフ童画館 ラムラム王

岡谷の市民であれば、小さな子どもからおじいさんおばあさんに至るまで、このラムラム王はもう熟知しています。これは、刊本作品139冊の中の55番目に『ラムラム王』というのがあります。これが武井さんを象徴する存在になったのは何故かという事ですが、この「フンムエスト・ガウマネスト・エコエコズンダラー・ラムラム王」人呼んで「ラムラム王」が、最後に遺書を残して消えてしまう場面があるんですね。その時に、こんな遺書を残しています。「1994年6月25日、日本國の山の中の小さな湖の辺に、ラムラム王はやがて生まれ変わるであろう。」それまで、探してくれたな...という一説があるんですね。これは取りも直さず、武井さんの誕生日なんですね。そうすると、お元気であれば、来年で110歳になられます。そういう武井さんが、非常に手の込んだこう



二木六徳氏

いうラムラム王というのを作ったわけですが、これが本をやや開いた形で来館者を待つということになります。

・武井武雄の展示室

館内入って、エレベーターで3階までいきますと、3階は武井さんだけのフロアなんですね。そしてエレベーターを開きますと、武井さんの写真の顔が迎えてくれるわけなんです。で、武井さんと密接な間柄であった人は、あそこで「武井先生、お久しう振りでございます」と頭を下げます。ここには、武井さんの仕事である3つの柱、童画・版画・刊本作品の展示室があります。

・武井武雄の図案

武井先生自ら、ご自分の第4番めの仕事とおっしゃっていた図案(デザイン)です。こうした武井先生の非常に斬新な威力、これは時代の節にかけてもいっこうに衰えがない、これはどこから来るのか、ということなんですね。これは一番の基本になるのは、子どもたちのための絵を懸命に描きたいということなんですけれども、もっと背後に背後に何があるのかということに関して、この絵を見てはっと思ったんですね。幼い子どもたちに丸と三角を提示している、そして武井流に左側が丸、右側が三角、そして丸に内接する正三角形、更に丸というこのデザインを、僕なんかだったら、子どもにはちょっと早いんじゃないかなあという気がしますが、しかし武井流のこの浸透のさせ方、これは後の武井さんのすべての作品の底流にあるものなんじゃないかなと思った次第です。

・武井武雄の手芸図案集

今、イルフ童画館では一階の「はらっぱ」というスペースで、この武井さんの手芸図案集をこの界隈の方々にお願いして、いくつかこれに習ながら実際の刺繍に作ってもらっているんですね。それが展示しております。これが実にいい。一気に描く線とはまた違って、線とはかくあるものかなと思ったりするほど、素晴らしい線なんですが、これはそのうちのひとつの図案なんですけれども。この武井さんの何といも素晴らしい、白と黒が織り成すこんな見事な映像はあるだろうかと思います。武井さん自信のコメントによりますと、非常に優しい柔軟な女の子、ないしは気弱な女の子の服のデザインに使ったらどうだろうかと書いてあります。

・鳥のオブジェと聖母子像のタペストリー

これは3階の武井さんの展示を見て、ふっと息をつきながら2階に移っていく階段のところです。そうすると上から、武井武雄の鳥の連作の中のひとつですけれども、鳥のオブジェとして吊るしてあります。そしてその向こうに武井さんの聖母子像をもとに織ったタペストリーがあります。建物の中に入ると、こうゆったりとした空間が作ってあります。

・童画大賞のポスター

武井さんの業績を次に伝えるためには、武井さんの作品そのものをみなさんにアピールすることも大事ですけれども、武井さんの次に来る若者たちにぜひ武井さんに次いで欲しい、という願いで、立ち上がって2年目ですけれども、童画大賞という取り組みをはじめたわけです。これはよかったです。全国から、海外も含めて600点を超える作品が集まったわけですけれども、その第一回目のポスターがこれなんです。「空」という武井さんの覇気のある作品です。この大賞はビエンナーレですので、今年が第3回目を迎えようとしています。

・イルフ・コンサート（2001年12月）

岩川智子さんという作曲家が、武井さんの楽しさ、豊かさに惚れ込みまして、ぜひ、武井さんで作曲をしたいということで、懸命に作曲したんですね。それを地元のカノラ少年少女合唱団とかカノラ芸術祭合唱団の人たち、それとここで結成をしたオーケストラで、演奏した訳ですね。そして、彼らの上には、毎回毎回曲が変わるたびに、武井さんの作品を映像で映したんですね。

これからイルフ童画館をどうするか、という問題がありますけれども、みなさんからも助言をいただきながら、さらに武井武雄の優れた業績のアピールに、また、さまざまな視点の中での武井武雄を発掘、若者の発掘も含めてですけれども、それを進めていきたいなと思っています。

香 それでは次に、津和野町の安野光雅美術館の大谷鞆音館長から、お話をいただきます。

◆安野光雅美術館

大 先ほど、ワイルドスマスさんの話を聞いていまして、一気に絵本の世界に引き込まれました。というのも私、最近、双子の孫が2歳になって、絵を書いてと言われるんですけども、子どもとのコミュニケーションというのは、絵本を通してとか絵を通してコミュニケーションというのがあるんだなあと実感していましたし、先ほどのお話でさらに強く感じました。

さて、安野先生の美術館ですが、私は安野さんを絵本作家とあんまり思っていないくて、ただ、色々なことができるマルチな画家だな、という感じでお付き合いをしてきました、編集者と著者という関係で今日まで至っています。美術館ができるそもそものきっかけから参加しておりますので、ちょっとお話をしたいと思います。（以下スライド）

・津和野駅前からの町の全景

安野先生は、この美しい津和野の町並みが歯が抜けたように寂れた町になっていくことを非常に恐れていらして、綺麗な町並みを保存したいというのが、まず頭にあったようです。漆喰となまこ塙という和風の建築で、勿論中味は鉄筋が入っていますが、そういう和風の石州瓦の赤とを使って、津和野の町並みに昔からあったような美術館を作りたいということで、色々と見て歩いたのですが、結果的には匠設計という安野先生のアトリエを作られた設計者が設計した建物になりました。

・玄関ホールに入って中庭から見た風景 玄関ホール

右側がショップ、突き当たりに「魔法人」があります。魔法人の右手前にいわば47文字を使った「津和野の風」とおいう安野先生の作品があります。天井もかなり高い建物で、ゆったりと和風の味わいをいかして作ってあります。

・第一展示室

展示室そのものは、この第一展示室が300平米、第二展示室が150平米くらいの広さです。第一展示室を、三つくらいのブース



大谷鞆音氏

に切ってテーマごとに展示をしていますし、第二展示室では、この美術館が頭においている<芸術と科学>の科学というコンセプトで展示をしております。この美術館の特徴として、安野さんの絵とともに文章というものが、私も大好きなので、絵と文をよく見てもらえるように、画文一致の美術館というような感じで展示をしております。

・学習棟2階・安野さんの再現アトリエ

右手の部屋に茶の間が入っていて、ここでも先生は絵をお描きになっているし、右手のところに安野さんの書が掛かっているコーナーがあるんです。非常にゆったりとしたアトリエです。

・学習棟に通じる廊下

これは、展示室から学習棟、昔風の教室とか図書館に通じる廊下です。

・昔の教室

安野さんのお考えの中に、「小学校時代の教養というものが一生を左右する」というのがあって。昔習った九九の計算だと、難しい旧漢字だと20字づつ書いて来いと言われて、「こげえなもの書いてもしようがないな」と思いながら書いていくうちに古い漢字を覚えていく、今でも旧漢字で読めるのは、その小学校の教養のおかげであるということで、昔のお父さんやおじいちゃんたちは、こういうところで学んだんだよということで、子どもたちには見て欲しいし、また、昔の子どもであるお父さんやおじいちゃんたちは、ここで昔のことを思い出して欲しいし、まあ、懺悔することもあったら懺悔して欲しい、ということのようです。

・ガイダンス室

館内の案内と、津和野の周りの観光案内、安野さんの著作リストだとかいったものが検索できる部屋です。

・プラネタリウム

ここは、安野さんのたつての希望でできたプラネタリウムです。50席あります、ここは、<芸術と科学>ということで、安野さんは自分が今どこに立って、この世に生きているのかというものを認識してほしいし、正しい理解を持った自分の判断で色々なことができる人になってほしいという強い希望がありまして、ここで津和野の四季とか、天動説だと絵本に関連したプログラムが3つ入っています、これを順次取り替えていっています。美術館でプラネタリウムがあるのは珍しい、まずははじめてではないかと思っておいます。ここで夜空を眺めながら休息を取る人もおりますし、なかなかいいコーナーではないかと思います。

香 この安野光雅美術館は、やはり、絵本作家の安野光雅さんの



岩村和朗氏

個性というか、思想というものが全館に行き渡った素晴らしい美術館だと思います。プラネタリウムが併設された館というのは、他にないと思います。例えば、文化センターという形で、プラネテリウム施設と美術館施設が併設されているところは、他にもあると思うのですが、美術館の内部にこういったプラネタリウムがあるとか、あるいは昔の小学校の教室を再現しているコーナーがある美術館というのは、安野美術館の最大の個性ではないかと思います。

それでは、次にいわむらかずお絵本の丘美術館の岩村和朗さんから、お話をうかがいます。

◆いわむらかずお絵本の丘美術館

岩　私の美術館は、ここにいらっしゃるお三方の美術館とは、基本的に違うところがいくつかあると思います。そのひとつは、まだ現存している、作家活動の現役である絵本作家の美術館であるということですね。もうひとつは、美術館と言えるかどうかはわかりませんが、私たちはフィールドミュージアム、美術館と博物館が一緒になった、でも、今までの博物館の考え方ではないというところが特徴だと思います。

私は1970年に絵本作家としての活動をスタートしたんですけども、その5年後に私は東京生まれなんですけれど。栃木県の益子町というところに移り住みまして、もうすぐ30年になりますけれど、絵本を描き続けてきたんです。『14ひき・・』とか、『トガリ山の冒険』とか『かんがえるカエルくん』などの絵本をずっと描いてきました。それらの絵本は、私の身の回りの自然を見るというところから制作をしていくという風になっていたのです。そして、30年近く絵本制作をする中で、私の絵本と自然、子どもというものは切り離すことができないものになっていったのです。

で、ところが今から15年とか20年くらい前でしょうか、子どもたちが自然の実体験から、どんどん遠ざかっていくという方向へ日本の社会が進んでいく。そのことに対して、自然からたくさんの中のものをもらいながら絵を描いている私としては、非常に心配になっていました。そんなことを考えているときに、私の家族と色々な話をしていて、こういう絵本美術館のような活動をしようかということになって、幸い私は5人の子どもに恵まれておりまして、その上の方向の子どもたちがそのことをやりたいという風に言い出してくれたわけですね。そんなことで、この絵本美術館の計画が始まったわけです。で、計画のはじめから、広いフィールドのある、私の絵本の舞台である里の自然をフィールドの舞台

として持っている、そんな美術館にしよう。そのフィールドの中には農場が欲しい。それは何かというと、子どもの本を描くということの中に、「生きる」ということあるいは「生命」ということ、非常に基本的なところに触れていく、それがとても大きなテーマになるんですね。で、生きるということの中心に「食」というものがあります。どんな生き物もものを、命あるものを食べています。その食の中心に中心に「農」というものがあるわけですね。その「農」と子どもたちと結びつけることも大変重要である、絵本を作るだけじゃなくて、そういう実体験を私がしているように、読者にも絵本の世界とともに同時に同時にもってほしい、そんな私の強い願いがあったわけです。

私のような絵本作家がそう言ったって、そんなすごいお金を持っているわけじゃありませんので、夢のような計画であったんですけども、いくつかの候補地があって、栃木県内の市や町から誘致がくるようになりますて、その中で馬頭町というところが、非常に熱心に、誠実な対応してくださって、じゃあここでやろうということになったんですね。非常に幸運な夢のようなことなんですけれども、前の町長さんが「ここはいいぞ、ここが町で一番いいところだ」と言って、地主さんと交渉してくれた土地があるんですね。それが、今美術館があるところなんですが、その隣の丘に私が夢のように思っていた農場があったんですね。で、この隣の農場主さんと話しているうちに、そんな素晴らしい計画なら、ぜひ一緒に活動をしましょうと言ってくださいました。そういう訳で、町が美術館のまわりの広いフィールドを地主さんから借りてくれて、そしてその隣の農場主さんが自分の農場を解放してください、農業はそのままつづけているんですが、そこを来館者の人たちが自由に歩いていい、時にはそこで色んなイベントと一緒にやってくれるということで、だいたい10町歩、10ヘクタールの広いフィールドを持った美術館が誕生したわけです。

実は栃木県と言うのはどこが栃木県か分からぬと言われるようなところですが、馬頭町と言うのは、その栃木県と茨城県の県境に近いところ、栃木県の北東部といつていいところで、旧水戸藩の町です。馬頭院というお寺があるので、そこから馬頭町となつたようです。町の西側には、那珂川という非常に大きな美しい川が那須から走ってきている、その川の岸の丘の上に美術館はあるのです。絵本の丘美術館と名づけたのは、まさにその高い丘の上にあるからなんですが、美術館のある丘と農場の丘を合わせて、絵本の丘と名づけて色んな活動を始めたわけです。

その魅力は、私が求めていた里の自然の要素をふたつの丘の中にコンパクトに揃え持っていると言うことなんですね。例えば、草地がある、雑木林がある、篠藪があつたり桑畠があつたり、田んぼがあり小川があり、溜池があり、そしてその農場には勿論畑があつて、牛が放牧されていて畜舎がありという風に、里の農業を中心とした自然を構成するものがすべて揃っているということ。そして、すぐそばには周りが質素な温泉街があり、町営のキャンプ場がありということで、宿泊施設も揃っていたりするもんですから、大変魅力的な、私たちがやろうとしていることにぴったりな場所だったわけです。それでは、スライドをお願いします。

・美術館

これが美術館の全景です。この左に私のアトリエを建てました。ここで仕事もしようということです。

・展示室

これが展示室です。「絵本と自然の部屋」という風に名づけていますけれど、外の自然と絵本の世界を結びつけるような展示をしていくこと、今は里山の自然を撮っている今森光彦さ

んのトンボの写真展、そして、私の14ひきのトンボ池の作品とがジョイントするような展示をやっています。館内は、玄関から全部、バリアフリーになっていまして、車椅子の人が館内を自由に見られるようになっています。

・絵本の展示室

これは絵本の展示室ですが、予算がないこともあって、展示台やケースは全部私がデザインして、建具屋さんに作ってもらいました。

・ミュージアムショップとティールーム

この材料は杉の木です。地元に密着した活動をということで、この馬頭町の山から切り出した杉の木で全部作られています。床は那須の唐松で、柿渋を床に塗っています。

・西側の眺め

ここはティールームを出たところにデッキがあるんですが、ここから見晴らしができます。この前の方に日光の男体山だとか、塩原の山だとか栃木県の山々が見えています。これを降りたところが那珂川ですね。

・小さな表示でのフィールド展示

これは、とうもろこしについて書いてある表示なんですけれど、このとうもろこしは、いつ植えて、いつ頃収穫するかというようなことが書いてあります。こんな表示が、いたるところに書かれています。

牛小屋の前に行くと、赤ちゃん牛がいます。この赤ちゃん牛はいつ生まれたのか、というようなことが書いてある。そして、この牛は10ヶ月まで育つと売られ、今度は別の農場に連れて行かれて、あと2ヶ月育てられると、みなさんの食卓に上ります、…というようなことが書いてある訳です。

・りすのえさ台

ここでは、いろんな所で、来館の人と生き物を結ぶ工夫をしていますが、これはりすのえさ台ですね。こういうえさ台を作つておくことで、りすがえさを取りに来るりすと来館者と出会える機会が増えるという訳ですね。このりすは、「チクリンさん」という名前で、私の「クリス・チクリン」という作品の主人公になっています。

・朗読とお話の会

ここでは、展示だけではなくて、いろんなイベントをやっています。これは、朗読とお話の会という、月に2回の土曜日、この小さなホールで私自身がやっているイベントです。時間を2時と決めているんですけど、いつもこんな風に来館者の人たちが2時から来る待っていてくれて、フィールドの自然の話、生き物たちの話をして、それから私の絵本を子どもたちと一緒に読むということをやっています。

・農場のイベント

いろいろなイベントをやっていますが、これは農場のイベントですね。こんな風にして、「種まき 種まき…」というので、これは落花生の種を蒔いているところです。いろんなところから、家族連れが集まってきて、こうした農場のイベントをやっていきます。

この右側にいる人が、農場主の佐藤さんという人で、この方のお陰で私たちの構想が見事に実っていったという人なんですけれど、これは「そら豆」についての話を子どもたちにしてくれている所ですね。ずっとこの地で、高校を出てからずっと農業をやっている人なんですけれども、非常に話が上手ですし、こういうイベントの前には色々と勉強をしてくれるんですね。で、子どもたちからも親しまれています。

・かばちゃの収穫

これはかばちゃの収穫ですけれど、ここでは種まきをしたら、途中で草取りをして、そして収穫をする、イベントが3回に分かれているんですけど、収穫の時には必ず食べます。自分たちが種まきをしたもの食べるということをやります。そして、みんな食べ終わって満足したところで、私の「14ひきのかばちゃ」を読んでいるところです。種まきのところでもこの本を読んで、そして夏になって収穫をしてまた同じ本を読むと、子どもたちの中でこの本がまた全然ちがった見え方がしてくるのではないかと思います。

こうした館内の展示をするとともに、フィールドでさまざまな活動をするということをづけてきていますけれど、今、この美術館は丸5年になりました。作家である私が嬉しいのは、親子三代の来館者が多い、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんと子どもたちという来館者がとても多いということです。子どもたちの元気な声がいつも聞こえてくるというそんな美術館で、作家としての私もとっても嬉しく思っています。そして、この絵本の丘を舞台に、そこに生きる生き物たちを主人公にした物語、絵本を描いています。元気である限り、そんな作品を一生懸命描いていこうと思っています。

香 どうも、ありがとうございました。まさに、岩村和朗さんの絵本の世界が、この絵本の丘美術館とそれを取り巻くフィールドの中に満ち満ちている、そんな素晴らしい映像を見せていただきました。それでは、4番目に安曇野ちひろ美術館の館長の松本猛さんから、お話をさせていただきます。

◆安曇野ちひろ美術館

松 どうも、こんにちは。松本です。今、3人の方からお話を聞いていて、いろんな美術館ができてきたなあと思って、なかなか感慨深い思いに浸っていたんですけども。1977年にちひろ美術館を作ったときというのは、今と全く状況が違いました。

なぜ、ちひろ美術館というものを作ろうかということを考えたかといいますと、勿論、母親であったいわさきちひろが亡くなつて、その作品をどうしようかということを考えたのは勿論なんですけれど、それ以前に、私はちょうど美術史をかじっていたものですから、絵本の絵描きたちの仕事というが、ほとんど美術として扱われていないという現状に、わりに憤りを感じていたんです。例えば、武井武雄さんの作品だと、初山慈さんの作品だと、素晴らしいものが山ほどなりながら、美術史でそれが登場するということはありえないわけですね。絵本、特に子どもの本の絵本ということに関して言うならば、飴かおもちゃか、絵本かという風に言われている時代でしたから、絵本の絵が美術であるというようなことは誰も考えようしなかったわけです。それに對して、じゃあ、武井さんや初山さんや、母いわさきちひろのような作品というのが、美術として価値がないんだろうか?ということを考えたわけです。これはどうしても誰かが問わなければならぬ問題だろうという風に思いました。

例えば、江戸の浮世絵のことを考えたときに、あれは町絵師たちが描いたもので、要するにお土産品であったり、役者のプロマイドであったりしたわけですね。当時、誰もそれが美術品だという風には思わなかったわけです。ところが、それがある時海外へ流出していって、逆評価されて、そして現在日本を代表する重要な美術作品として認識されているわけですけれども、果たして、日本の美術、あるいは世の中の美術というものが、今のタブローを中心とした世界だけで評価されていて、本当にいいんだろうか

ということを考えたのが、美術館をつくろおうと思った根底にありました。

ですから、最初の名前は「いわさきちひろ絵本美術館」という風にいたしました。これは、「絵本美術館」という名前は要らないんじゃないかなと、まわりの人たちに言われたんですけども、敢えて、それをつけたかったんです。そして、オープンは、勿論いわさきちひろで始めたんですが、開館してすぐ後に、当時はコレクションをする力はありませんでしたけれども、長新太さんだと安野光雅さんだと瀬川康男さんだと、谷内こうたさんだと赤羽末吉さんだと、そういう現代の絵本画家の展覧会をすぐ開催しました。これは、勿論、絵本としては知られていてファンがたくさんいたんですけども、その作品自体の美術的な価値を問うてみたかったというのが大きな理由でした。そして、多くの人々は、美術史かとか美術評論家たちと違って、その作品をたくさん見に来てくださり、楽しんでくださった。そうすると、これだけ社会的な評価がきちんと得られる、あるいは、興味を持ってくれる人たちがたくさんいるにも関わらず、それが美術として評価されないのは、おかしいだろうと。ということで、私自身は絵本の評論というものをやりはじめようと思ったわけです。

そして、東京のちひろ美術館は、今年で開館して26年目になりますが、昨年前面建て替えを行い、全館バリアフリーになりましたので、ぜひ、見ていただきたいと思いますが、こうした美術館の活動を行っておりました。美術館活動をしながら、私の方は本を作るとかといった活動を展開して少しづつファンを増やしていました。それは、どうしてかといいますと、日本はもとより世界中をまわりまして分かったことというのは、どんなに素晴らしい絵本の原画であっても、ものすごい勢いで散逸しているということです。本人が亡くなった後、ご遺族の方がもっていらっしゃるというケースは勿論あるんですが、2代過ぎるともうほとんど無くなっています。どこにあるのかわからない。ご本人でも原画の価値をきちんと認識されていない方もいるとということが分かったんですね。そうすると、これは誰か気が付いた人が集める以外ないだろうということを考えまして、コレクションをしようということで、いわさきちひろの印税をベースに、作品を購入する活動をはじめたわけです。

そして、一定の作品が集まってきた段階で、東京のちひろ美術館は大変に小さかったですから、作品を見せるといつてもひとりの作家の作品をちょっとずつ見せることしかできなかったものですから、せっかく集まっている作品をきちんと人々に見ていただけるような場所ができるだろかと考えました。例えば、ルーブルに行けばモナリザがあそこにあるなとか、ラファエロがあそこにあるなということがわかるわけですから、そんな風にして絵本の画家たちの作品をいつでもきちんといいものが見られるような場所を作りたいというようなことを考えまして、1997年に安曇野のちひろ美術館を作りました。ちょっとスライドを見ながら、今の安曇野ちひろ美術館の様子について、お話をしたいと思います。

・美術館・公園全景

ここから車で45分くらいのところに、松川村というところがあります。安曇野ちひろ美術館は、そこにあります。まわりの公園は、松川村が協力をしてくれて、約1万坪の公園を作ってくれました。そして、正面の建物は、内藤廣さんという建築家が作ってくれました。背景のアルプスの山並みと重なり合うような、そんな建物にしたいと。本当ならば、この美しい自然の中に建物なんかいらないんだけれどもと言って、なるべく控えめな建物にした



松本猛氏

いということで、こういうデザインになりました。壁の色は松川村の砂を練りこんでいて松川村の地面の色です。正面奥に見えているのが蓮華岳、右の方にいきますと爺ヶ岳とか鹿島槍とか白馬連邦が見えます。

・池と山並み

この池は、チェコの作家のクヴィエタ・パツォウスカが何回もここに足を運んでデザインをしてくれた池です。水深10cmで、子どもたちが溺れない深さにしようということで作りました。

・パツォウスカの石のオブジェ作品

これはここを造成したときの石なんですけれども、その石を使ったパツォウスカのオブジェです。ここに公園には遊具と言うものがないんですね。ただし、坂と木と石があれば遊べるだろうと、そういう公園にしました。実際に子どもたちは、坂を転がったり、石の上に飛び乗ったり、ステンレスの鏡に顔を映したりして遊んでいます。

・エントランス

・ミュージアムショップ

僕は、ショップというのは大切だと思っているんですね。展覧会の会場で、一枚の絵の前を10秒位で通り過ぎる人が、ポストカードを一枚選ぶのに5分かかるから、絵との出会いというのは、ミュージアムショップにあるのかもしれないというのが僕の持論なので、ここも景色がよく、窓際には椅子が置いてあって、常時100冊くらいの絵本が揃っています。

・コレクション作品 赤羽末吉『だいくとおにろく』

現在、私たちの美術館には、世界の26ヶ国、158人の画家の11500点余りの作品が集まっています。これは、赤羽末吉さんの『だいくとおにろく』ですけれども、赤羽さんのご遺族からは6000点あまりの作品が寄贈されました。赤羽さんの作品も、色々なところで希望があった場合に出品するようにしています。ただし、絵本の原画というのは今まで非常に扱いが悪くて、直射光があたるようなところに飾られていたりすることも正直言ってあったんですね。ところが、日本画の画材だと、水彩というものは、非常に光に対して弱いものですから、色々な申し出はたくさんあるんですけども、光と温湿度管理が整ったところでなければ、申し訳ないのですが出品しないようにさせていただいている。

・コレクション作品 モーリス・センダック『かいじゅうたちのいるところ』のイメージ画

・コレクション作品 ジョン・バーニングガム『おじいちゃん』表

紙絵

イギリスのものについては、古いものも含めて、かなりたくさん収集てきてています。やはり、絵本のルーツと言えますので、いろんなものを集めるようにしています。

・コレクション作品 ピネット・シュレーダー作品『わにくん』連作

・コレクション作品 ユゼフ・ヴィルコン「アニマル・バンド」

これはポーランドの作家、ユゼフ・ヴィルコンの作品です。絵本の作家というのは、絵本だけでなく、絵本以外の色々な仕事をしていますが、ヴィルコンの場合には、こうした木彫とかの作品がたくさんあります。あとはブリキで作った作品なんかもたくさんありますが、ヴィルコンの魚は、天井からぶら下げて展示をしていたりして、遊んでいます。

コレクションには、ラテヨフの『てぶくろ』の原画もありますが、ラテヨフもやはり木彫の作品を作っています。こうした作品もできるかぎり展示するようにして、ひとりの画家のいろいろな側面ができるかぎり見られるようにと考えています。

できる限り常時、世界中の多くの絵本作家たちが、どれだけ素晴らしい作品を描いているのかということを、原画でやはり見てもらいたいというのが私たちが美術館を作った大きな理由です。そして必要なこと、大切なことと言うのは、この活動をどうやっての継続させていくかということです。美術館というのは、現在あるものをコレクションし続けることによって、子どものためのイラストレーションと言うのが、将来へ継続して繋げられていくのだろうと思っています。私たちの美術館は、どうやってこの文化を後世に伝えていくかということのためにも、来館者を増やすための努力は、本当によくやっています。そして、良さをどうやって知ってもらうための努力も必死でやっています。どこの美術館も今は本当に苦しいと思います。全国に30館以上の絵本関係の美術館ができたということは、嬉しいことですけれども、それをどういう風にこれから発展させていくかということが、これからの課題だと思います。

◆絵本美術館の使命とは

香 最後に松本さんがおっしゃったことが、美術館を考える上で、最も重要なことではないかと思います。というのは、美術館は、常に発展し続けなければならない。日本には絵本美術館も含め、随分多くの美術館があります。その大多数とは言いませんが、ある一定のパーセントの美術館は、設立された瞬間がピークで、そこからはずっと坂道を降りていくにすぎない。つまり、発展する美術館ではなくて、滅び行く美術館として設立された、そういう美術館があまりにも多いのではないかと思います。けれど、今、松本さんがおっしゃったように、美術館の使命というのはどこにあるのか?最後の結論のところで、みなさんにお話をしてほしいと思うのですが、やはり、現在、われわれが手にしている文化と言うもの、我々が作り出したものの、あるいは我々の祖先たちが作り上げてきた文化というものをどれだけ損なわずに後世に伝えることができるか、その一点に美術館の使命と言うのがあるのではないかと思うんですね。で、そういうことからすると、やはりこの安曇野ちひろ美術館の生き方というのは、素晴らしい生き方じゃないかと思います。

私自身、絵本原画展の企画と言うのを随分やっていますが、その原画を展示する上での条件であるとか、環境であるとかに十分気配りをする必要があるんですね。その場合、美術館サイドでは、非常に厳格にそういう条件が守られているのですけれど、会場に

よっては、そういうことを無視した展示が行われているところが多い。作家から原画が借り出された場合には、作家の方々はそういう厳しい条件というのをお付けにならないので、私たちから見ると、とんでもない展示が行われていることがあるわけですね。でも、こういう風にちひろ美術館に作品が一旦収蔵されてしまうと、借り出しをするのに厳しい条件が付けられるようになる。これは、素晴らしいことだと思います。勿論、借りにいくのがすごく難しいと言うマイナス点はあるとしても、その作品の価値を守る、なつかつ、それを死蔵するのではなくて、その作品というものを生きさせるために非常に厳しい条件をつけるという、そういうコレクターの手に入ったということは、まさに文化を損なわない、これから後世に伝えていくにあたって、非常に素晴らしい環境にその作品が置かれたということになるんじゃないかと思います。

◆絵本美術館の理念

それでは、4人の方々のお話を踏まえて、絵本と絵本美術館、あるいは美術館において絵本を扱うということの意味ということについて、今から考えていきたいと思います。4人の方々のお話を聞いて、質の高い美術館というのは、かなりのところで共通部分を持っているなと感じています。まず、第一にその美術館を設立するにあたって、非常にきめ細かく理念というものが計画全体に及んでいることがあります。設立の主体となった人々の理念というもの、思いというもの、美術館というものはこうあるべきという思想というのが、やはりその計画全体に行き渡っている。そこから出発しているからこそ、質の高い、あるいはレベルが高いという評価を得られたのではないかと思います。

それでは、これからそれぞれの美術館において最も重視している理念というものは何なのかということについて、お話を伺いたいと思います。

二 今我々がイルフで思えることは、武井武雄という大正から昭和にかけて、非常なるリーダー、権威者であった武井さんの作品を後世にどう残していくかという話の流れの中で、第二次大戦の中で、武井さんは池袋に住んでおられたのですが、それまでの作品が一切灰に帰してしまったため、1945年以降の作品が中心になるわけですが、あれだけ多彩な武井さんの業績をどうやって集大成して、そしてそれが武井さんのなかでお互いに関連を持ちながら、例えば童画と版画と刊本作品、これは非常に緊密に繋がっているわけですけれども、その3分野のつながりと、現実に残された作品を掘り起こしていくこと。そして、武井さんの仕事がよりよくアピールできると言うことの方法を考えているわけですけれども、まずは何と言っても、武井さんが残した作品の収蔵がまだまだという段階なので、もっとこれとこれを繋げてみたい、という時に現実の作品が十分にはない。それと同時に、武井さんと同じ時代に活動された人たち、日本童画会の侍たちを一同に介しての展覧会をやってみたい。それは取りもなおさず、その時のものすごい子どものためのエネルギー、それを何とか知らせたい。そういう意味でも、試行錯誤という感じです。

香 そうですね。武井さんの場合は、現物がどこに眠っているのか、この世に存在しているのかどうか、という点でもまだ不確定な部分があるのではないかと思いますが、そういう調査に関する点でも、相当努力をされているんですね。

二 そうですね。それともう一点は、武井さんが亡くなつて、もう来年は生誕110年という年にもなるわけで、そういう中で武井さんを知っている人たち、武井さんの仕事振りを目の当たりにした

人たちも次々にという状況の中で、やはり、生きた人たちが武井さんの作品をどのように受け取っていたのか、そういう感じ方も集めたいという風に思っています。

香 そうですね。美術館の使命として、ただ作品を集めるとのことだけではなくて、情報そのものを収集していく、それも今現実に消え去ろうとしている情報をできるだけ正確にどれだけ多量に残していくかということ、そういうこともまた美術館に課せられた使命ではないかと思いますが、武井さんの場合、まさに今それが問われているのではないかと思いますね。

大 現在館には2700点のコレクションがありますが、これから安野先生には大分ノルマを課していまして、今年がちょうど喜寿なんですけれど、絵本を描きはじめて今年は100冊目ということもあり、この秋には100冊目の絵本が出るかと思います。美術館自体も、安野の思いが籠っている、建物もあっちこっちを見て歩いて、ご自分の思いとおりに作っていきますね。非常に語り口はソフトなんですが、以外に頑固で、どうしてもプラネットリウムを作りたいなって、こう一言言うんですよね。で、どのくらいでできるかねって。一億円くらいで、できるかね...なんて言っている内に、結果的には2億円とかね。でも、見てみたらやはり非常に好評でよかったです。一昨年オープンをして、一年間で、86000人の入館者が入りました。で2年目は若干落ちて、60000人位ですかね。安野さんという人は、お付き合いをしている方もたくさんいらっしゃいますし、いろんな方々をお呼びしてトークショーをやったり、この間は壇ふみさんだと彫刻家の佐藤忠良さんとか宝井馬琴さんだと、畠暮の加藤九段とか小川三段とか、岸田今日子さんをお呼びしての朗読会だとか、いろんなことをやりながら、安野光雅美術館をアピールしていくという、そういう努力はしていますし、先生も美術館に寄せる思いというのは、非常に強いものがあるので、私もその意を戴して、何とかいい美術館にしていきたいなと思っています。

岩 先ほどお話をしたように、どんな展示をやるときも、イベントをやるときも、絵本と自然と子どもという、この3つをいつも結びつけながら考えていくということが中心になっていると思います。その絵本の世界と、自然の実験を同時に持つ事ができるという空間を作っていくんだと、そのためにはどうじたらいいかということを、これからも色々な形で工夫をしながら、色々な方たちの力を得ながらやっていこうと。いつも感じているのは、私は絵本作家でよかったなあということを、この美術館をはじめてつくづく思います。それは絵本というものが、私が作ろうとしている絵本というものが、子どもたちが読者である、大人も勿論ですけれども、子どもたちが大変大事な読者であるという絵本を作ろうと思っている。子どもたちにたくさん読まれる絵本の持っている力というものが、すごいものなんだなあという風に思います。先ほど、美術館来館者に3世代の方が多いと話しましたが、それが絵本が持っている力のひとつの表れではないかなと思うんです。で、絵本というものが非常に長い時間、人々の心にずっと残っていくという、そのことのひとつの表れではないかと。そして、3世代というのは、一緒に来たおばあちゃんは、自分の娘を育てるときに絵本を子どもたちに読んであげるということをやっていて、14ひきシリーズはもう20年になりますから、その子どもだった人たちがお母さんになっていて、自分の子どもを連れて来る。そして、自分が子どもだった頃、母親や父親、あるいは先生に読んでもらった、その世界に会いたくて来るという、そういうことがたくさんあるんですね。長い時間を経て、世代を超えて、あるいは国を超える力を、絵本というものは持っているだなあということ

を、つくづく思います。

◆美術の入り口としての絵本と絵本美術館

松 今日の基調講演で、ワイルドスミスさんが、美術館で原画を見て、絵本を見ると、その落差にショックを受けたというようなことをおっしゃっていましたね。あれは勿論、ものすごく印刷が悪い例がありますので、絵描きさんがそれでショックを受けるということがあるのはよくわかるんですけども、僕は絵本と絵本の原画というものは、両方とも価値があると思っているんです。例えば、音楽いうなら、レコードやCDを楽しむ人たちはものすごくたくさんいますよね。レコードができたからこそ、音楽が人々の中に大きく広まっていたわけです。で、同じことは絵に関する言えるわけでして、絵本というのは、当然、複数性の芸術ですから、たくさんの人たちが手にすることができるわけです。それは空間芸術であると同時に、時間芸術の要素が入っていますから、ビジュアルな要素と物語を同時に楽しんでいくことができるんですね。そして勿論、音楽のタイプのような原画の輝きという、画家が直接描いていったという、そういう感動とは違うかもしれないけれど、絵本の持っている力というのは、ものすごく大きなものがあるわけです。でも、その世界を寄り深く認識するために、絵本の原画を見るチャンスがあったら、本当はこんなに素晴らしい色だったんだということがわかるわけですね。で、美術館の役割というのは、そこにあると僕は思っています。そして、岩村さんをはじめ現在の絵描きたちは、原画に対して、ちゃんとした意識を持っておられるようです。基本的には1960年代頃から、絵本の絵描きたちが著作権の保護を訴えていて、原画は画家のものなんだ、そして出版社には、その使用権を売るんだということで運動をはじめたわけなんですね。からり、今多くの編集者の人たちも、原画というものは大切なものなんだということが、わかりはじめてきたんすけれども、それ以前の編集者たちは、そうした意識がなかったんです。原画は原稿と同じだったんです。ポイポイ捨てられていたんです。ですから、初山さんとかあの世代の方たちの作品はいいものが、どんどんどんどん無くなってしまった例があります。これはを意識のある人がどこかで発見したら、これは大切なのだということで集めてこなくてはいけないと思うんですね。こういうことを積み重ねる中で、原画の価値と絵本の価値と、その両方をアピールしていくことが大切なんじゃないかなということを思っています。そして、絵本というのは本の入り口である、文学の入り口であるということは、色々なところでよく言われています。が、同時に絵本は美術の入り口でもあるわけですね。絵本を見て、一枚の絵から色々なことを想像するのが、子どもは楽しかったりするわけです。例えば、僕自身で言うと、子ども時代に月刊絵雑誌の「キンダーブック」で武井武雄さんの絵があって、それは木が立っていて、その木の皮が半分ぐらい剥がれているんですけど、それを動物たちが滑り台にして遊んでいる絵でした。これで、僕は絵が好きになって、一生残っているんですよね。おそらく、今の子どもたちにも同じような経験を持つ子がたくさんいると思うんですね。そんな子どもたちが絵本美術館に行って、絵本の原画に出会って、あの感動した絵がもっとこんなに美しかったんだと思えば、絵が好きになるだろうと思います。それは、きっと美術館というところに足を運ぶようになります。そうすると、それは子どもたちにとって、文化が豊かになるということだと思うんですね。そういう役割が絵本の美術館には、ひょっとしたらあるのかなあという風に思っています。

◆絵本と著作権

岩 子どもの本の絵を描いている画家の集まりに童美連（童画家美術連盟）というのがあります、そこがずっと著作権のことをやってきたんですね。私が入会した頃、著作権の初めの頃にいわさきちひろさんがいまして、理事会とかで非常に熱心な発言をしていて…。その前、童美連が出来る前に、武井さんが著作権のことに関して、大変熱心に発言をしていらっしゃいました。私は、20代の頃に、雑誌のインタビューとして、武井武雄さんのところにインタビューに行ったことがあるんですけども、行つたらいきなり、「君、口述にも著作権があることをわざわざ言ってるかね」と言われて、びっくりして何も言えなくなってしまった記憶があります。お二方のお話を聞いていて、そんなことを思い出したんですけども、著作権をきちんとすることで、絵描きの手元に原画が返ってくる、そのことで絵本美術館が可能になっている。私の美術館もそうですが、原画が返ってこなければ、あんなこともできないわけですから。

香 もうひとつお聞きしたかったのは、作家の立場として、絵本の原画が持っている輝きと、印刷された、出版された絵本が持っているもののズレというものがあるのか、あるとするとどういうところになるのか、ということについてお話を伺いたいと思うんですが。岩 それについては、近ごろコンピュータが普及してから、印刷技術の差が非常になくなってきたとは言えるんですけども、それでは、印刷は印刷で限界があると思うんですね。やはり、原画にはとても及ばない。まあ、でも私は何回も何回も色校正をとって、原画に近づけることもありますけれど、印刷物として、どうやったら綺麗になるかということに、本を作るときは集中しますけれど。それは、絵の具とインクと変わるだけでも、無理なことなんですね。

香 それでは、ある程度、諦めというのはお持ちなんですね。

岩 そうです。それは、原画の立体感とか、匂いがしてきたりとか、やはり印刷になると、非常に薄れてしまうということは確かにありますので。

松 これからは、原画がない絵とうのがどんどん出てくると思います。また、原画があった場合でも、例えば、トリミングだとクローズアップだと、左右逆版にするとか、さまざまなことが行われているわけですね。それはそれで、絵本というのはひとつの完成作品なんだと思うんです。映画は勿論、フィルムしかない訳なんだけれども、絵本の場合も絵本のスタイルしかないんだと思っているんですね。そして、それと同時に別の価値が原画にはあるんだと、そういう風に考えた方がいいんだろうと思います。

香 安野光雅さんは、そのあたりをどのように考えていらっしゃるんでしょうか。

大 私も実は、美術出版というものを長くやってきてまして、原画と印刷されたものとの差というのは、ものすごく感じているし、ちょっと許せないというところもあるんです。私も編集者として、ここまで出勘弁してくれということもあるんですが、大体、文字の間違いには気が付くけれど、色の間違いには非常に鈍感というところが、多くの編集者もそうだし、周りの人にもあるんですね。僕は、上がり主義というのをとっています。絵本として、あるいは美術書として、そこでひとつの世界ができていれば、原画の色と違ってもまあいいかな、と。安野先生は割りとおおらかなところがあって、僕らがこれはちょっと色が違うから何とかしようというような話をすることもします。原画と並べたら、原画の味というのは、どうしても生かされていないし、それはもうしようがないかな、というところもあるんですが、やはり、でき

るだけ近づけて、また、近づかないまでも、上がり主義でその本の中でその世界が生きていればいいと思っています。

香 絵本と原画というものを考えるとき、非常に難しいところがある、先ほど、松本さんがおっしゃったように、原画と絵本というものを同列に論じることは全くできない、別の価値があるものだと考えた方がいいということなのですけれども、二木さん、例えば武井武雄の刊本作品というものは、あれは今、イルフ童画館ではガラスケースの中に入っていて、あれを手に取ることはできませんよね。あれを、どうしても手にとりたいという衝動に駆られた場合には、どうしたらいいんでしょうか？

二 それは大きな問題で、例えば、復刻というものがありますよね。ですけれど、武井さんの刊本作品というものになると、それはそう簡単にいきませんし、でも、見る人々はガラスのケースの中ではやはり実感として味わえないし。そもそも一枚の絵をガラスのケースの中で見るのであれば、まだいいんですけども、本をある一ページだけ開いて、これを本として見よ、というのは非常に展示としては不満なんですね。最悪なのは、カラーコピーとかで、大体こんな感じのものですよ、と見せることはできるけれども、まあこれは、本当に最悪な状態のもの。やはり来てもらう人たちに、手にとって、こういう本ですよと実感してもらうために、ある試みをしたことがあります。日にちを限って、曜日と時間を限って、139冊の中の今日はこの数冊、その次はこの数冊と、来館された方にご覧いただいたんですが、これはまさに鑑賞するというのはこういうことだろうなと思いました。ガラスのケースの中にあって、9つの窓からのぞいてみると、ああすごそうだな、という感じで終わってしまうのが、これが一度、ケースから出して一枚一枚をめくりながらじっくり見てみたとき、本に寄せた思い、本への強烈な思い、本へのものすごい興味とか、本そのものへの可能性を持ちづけた武井武雄という作家が実感できる。また、みなさん、原画と印刷の差について言つていらっしゃいましたけれど、武井さんという人は、小さなピンホールの穴一つにしても、大方がまあいいじゃないというものを我慢がならない、納得がいくまでやらなくてはならないという姿勢できていました。それは、とりもなおさず作品の背後に、当時、絵については二束三文に思われていたのを、武井さんがやはり言葉と同じように絵だって懸命にやっているんだとということを示す意味で、原画の裏に「要返却」ということを明記した。これは、すごいことだと思うんですね。原画に対する武井さんの意気込みと大事にしてほしいという思い、これは後の人たちに、随分いい面を与えたんじゃないかと思うんですね。それともう一点、原画と絵本の落差というのは、これはもう拭いようがないと思うんです。じゃあ、どこでこれを良しとするか、ということに関していうなら、例えば、先ほどのワイルドスミスさんの作品ですが、先日までイルフでワイルドスミスさんの展覧会をしていたんですけども、これは驚嘆するほど原画を見るとあれほどコラージュをした人はいないと、僕は思うんですね。作者の使いまで感じられるほど。だけど、これが印刷されるとほとんど見られない。ということは、絵本はちょうど表紙を開いて、次を開いて中に描かれたものを一枚一枚繰り広げながら行く楽しさ、印刷は多少悪いけれども、そうした楽しさを持っている、これが絵本かなという風に思うんですけど。

◆求められる絵本作家に対する正当な評価

香 今ここで語って頂いているのは、武井武雄、いわさきちひろ、安野光雅、岩村和朗という、近現代の絵本の作家を記念する美術

館ばかりだったわけですけれど、冒頭で松本さんがおっしゃった、絵本作家に対する、不当な評価というのか、正当な評価の欠如ということなんですけれども、果たして、絵本作家というのが、現在、美術の大きな世界の中において、ある一定の不当ではない正当なる評価というものを、得る状況になったのかということについて、少しお話をいただきたいと思います。

松 多分、これは世界的見てもその動きはあると思いますね。アメリカを代表するのノーマン・ロックウェルというイラストレーターの美術館があって、その館長さんと時々お話をしますけれども、その方は今40代の半ばだと思いますが、学生時代、ずっと美術史をやってきて大学院まで行って、学生時代にただ2回くらいしかロックウェルという名前を聞かなかった、ということを言っていました。ところが、去年だったか、ニューヨークのグッケンハイム美術館ではじめてロックウェルの展覧会が行われたということを言っていましたね。これは、イラストレーターに対するはじめてのきちんとした評価だったと思います。同じように、僕は正直言って、ちひろ美術館を作ったときに絵本に分野に公立美術館が参入してくるのは、50年はかかると思っていました。ところが、随分はやまりましたね。おそらく、公立美術館が最初に絵本の展覧会をやりはじめてくれたのが、うちの美術館を作つてから10数年後だったと思います。それで、公立館の中で絵本の絵を展示してもいいんだと思いはじめた、これは大変なことのように思いますが。ただ、実際的にはおそらく世の中の学芸員たちは、もっと頭が古いですから、嫌々やっている人たちも結構いるはずなんですね。その人たちが変わっていくのには、もう少し時間がかかるだろうと思いますけれども。急速に変化し始めていることは事実だと思います。美術というものの自体が、複数性の原理に基づいた美術とか、あるいは写真とかというものに対する認識というのは、変わりつつあると思います。ただし、まだもう少し時間がかかるかな、というのが僕の感想ですね。

香 岩村さん、ご自身が作家であるということでは、お話をしにくいかもしれません、その点についてはどうでしょうか？

岩 大変に難しいところですけれども。まあ前よりは社会的には随分評価がされてきつつあるという気はするけれども、それじゃあ、一般の絵画やタブローというものと同等に扱われるかというと、それはまだ全然そんな風になつていないうな気がしますね。絵本が、またその絵本作家がどのようなレベルであるかということはありますけれども。

香 まだ、大きな意味でのアーティストという捉えられ方は、まだされていないという。安野さんのところでは、どうですか？

大 日本画の世界と安野さんの美術館と、原画とその印刷した世界というのと、発表形式は展覧会に出すとか、本を出してやるとか、その差がなくなってきたいるんじゃないかなという気はするんですね思います。やはり、芸術作品の発表の場が印刷物であることが認知されてきて、かなり昔よりは芸術家としてのステータスが上がってきているんじゃないかなという実感はもってきてるんですけども。

香 武井武雄というかなりビックなネームではありますけれど、やはり世間一般の美術家、あるいは芸術家という評価は、武井武雄の場合はどうなんですか？

二 それは、常に 半ば憤りをもって、飯沢匡が武井さんに成り代わって色々なところで書いているけれど、所謂、本絵描きに対して、たかが子どものための絵描きではないかという、そんな思いは武井さんにとって全然払拭できる中身ではなかつたと思うんですけども。今もそれは、勿論、その当時ほどではないとしても、

やはり、たかが子どものためのものじゃないかという思いは、陰に陽にあるように思います。しかし、やはり、絵本について、これは子どものものだけじゃなくて、大人たちも見ていいんだという視点は、ぐんぐんと増してきますし、僕なんかでも、美術の授業の時に、絵本は大事な美術の分野なんだということはつくづく思ったわけなんです。

岩 たかが子どものものとか、子どものものだからレベルが低いとか、そこのところが僕は間違っていると思います。今生まれて、これから生きていこうとする人たちが最初に出会うものはレベルが高くなければいけないということだと思うんです。

◆研究を支えるという絵本美術館の使命

松 実際に、美術館にくる人の中にも、美術と絵本の絵は違うんだと思っている人がまだいるんですよ。むしろ、それを変えていくのは、もうちょっと時間がかかるかもしれないと思うんです。それと、最後にちょっと言っておきたいことがあるんですが、武井先生の刊本は、実際に触らないとわからないというのは本当だと思うんです。ただし、誰でもが触れるわけではないんですね。ところが、絵本学会というのはある部分では研究者の集まりですから、絵本学会の研究者たちがちゃんとした手続きを取つて、うちの美術館なりイルフ童画館なりに行っていただいて、こうこうこういう理由でこれを閲覧したいと。こうしたちゃんとした申し込みがあれば、我々はいつも対応しているんです。その代わり、その場合は本を扱う時の扱い方から説明をします。ですから、絵巻物だってそうなんですね。絵巻物は、だいたい60cmくらいに広げながら見ていくものなんです。そういうものは実際に動かさなければ分からぬわけですね。ただガラスケースの向こう側にあったのでは、残念だけれど、深い研究にはならないと思うんです。ですから、せっかく絵本学会という場所ですから、本当の意味で研究をしたいという人々が組織されて、それぞれの美術館に行つて、こういう理由で閲覧をしたいんだということがあれば、美術館はできる限り対応するはずだと思います。

香 研究者に対しても開かれた美術館、研究の手助けというのも積極的に行つて、そういう使命も、また、絵本美術館は持つてゐるんだというのが今のお話だったと思います。もう時間が来てしまいましたが、先ほど、岩村さんがおっしゃったように、絵本というものが単なる美術、また単なる文学というものではなくて、世代を超えた表現力がある、世代を超えて共有するべき文化財であるという、この言葉は、やはり我々は肝に銘じて、これから絵本のことを考えつづけていかなければならぬと思います。結論めいたものも出ませんけれども、今後の絵本美術館を考えて行く上でのひとつのキーワードのようなものが浮かび上がつたのではないかと思います。今日は、どうもみなさん、ありがとうございました。

研究発表

■A室 座長：香曾我部秀幸・石井光恵

●大正期における少年の絵本・絵雑誌コレクション

札幌市中央図書館所蔵「池田コレクション」の概要とその意義
大橋真由美・相川美恵子・大橋慈・三宅興子
(日本絵本史研究会)

〈発表要旨〉

札幌市中央図書館には、明治期から大正期にかけて刊行された絵本・絵雑誌が多数所蔵されている。寄贈印から、これらが池田イシさんの寄贈によるものであること、また、持ち主がイシさんの夫である池田慎一郎（故人）さんであることが判明した。

本発表では、第一に、この寄贈本（以後、「池田コレクション」とする）を、書誌的整理を踏まえて示す。

「池田コレクション」は、絵本（95冊）、絵雑誌（185冊）、画手本（1冊）の計281冊である。内、絵本は、富里昇進堂刊行絵本（表紙落丁のため書名不明、1907.1）から、金井信生堂刊行『教の庭』（1917.8）までのものであり、16社の発行所（奥付落丁本以外）から刊行されている。絵雑誌は、「日本の子供」（1-2、1916.8）から、「児童画報」（2-12、1919.12）までの20種である。これらのほとんどは東京の発行所から刊行されており、絵本の大半は地本系発行所から刊行されている。これらの特徴は、日本の文化の伝統的な意匠や価値観を色濃く残しながらも、さまざまな近代的な意匠を織り込んで読者の興味を惹こうとしている点にある。

第二に、慎一郎さんについて述べる。

慎一郎さんは、池田慎太郎さんの長男であり、その祖父・新七さんは、近江から江戸に出て商人となり、1871（明治4）年に、開拓使貸付所勤務のために札幌に移住して、後、独立した。当時の札幌は、急速な近代化—それは計画的な都市建設によるものであったのだが—の渦中にあり、慎一郎さんは、そのような社会状況、裕福な家庭環境の下に幼少期を過ごした。

第三に、「池田コレクション」の特徴を端的に表している絵本の一例を示す。

その上で、急速に近代化を遂げつつあった札幌で幼少期を過ごした少年の絵本体験を検証する。

このような検証は、絵本史研究のみならず、日本の近代の有り様を考える上でも意義のあることと思われる。

註 『北海道立志伝編 第2巻』北海道図書出版合資会社、1903
高野隆之『北海道人名辞書』北海道人名辞書編纂事務所、1914

●大正期の絵本（池田コレクション）の特性

—「尽くし」的表現を中心に—

石川晴子・窪田美鈴・香曾我部秀幸・正置友子・丸尾美保
(日本絵本史研究会)

〈発表要旨〉

「池田コレクション」95冊の絵本は、題材から見ると英雄伝、合戦、乗物、新風俗、遊び等多様であるが、構成という観点からは陳列的方式を特徴とする。すなわち物語性を追求するのではなく、動物・乗物・人物・遊び等特定のカテゴリーのものを集めて、あまり法則性や価値観に留意せず陳列するという構成である。例えば『馬ヅクシ』『鳥の乗物づくし』『愉快尽し』などはタイトルの「尽くし」の文字でその構成を表しているが、タイトルにないものでも『猫のたのしみ』『影絵のポンチ』など大半がこの形式で構成

されている。この形式を仮に「尽くし」的表現と名付け、「尽くし」的表現という観点から「池田コレクション」の考察を試みることとする。

瀬田貞二が「江戸時代の絵本は、じつに、この図鑑風類別陳列方式〔ここで言う「尽くし」的表現〕が大部分でしょう」（『絵本論』福音館書店1985 p133）と指摘するように、この表現方式は江戸期の絵本の特徴であった。江戸の赤本『武者づくし』や上方子ども絵本の『天狗そろへ』などが格好の例であるが、多くの版本ばかりでなく大判（一枚絵）や双六などにも「づくし」と題されたものが多いことからも、「尽くし」的構成が江戸期の人々に愛好されたことがうかがえる。

「池田コレクション」の「尽くし」的表現の絵本は、伝統的な江戸文化を継承し、「趣向」を楽しもうという意識が旺盛であり、遊技性・娯楽性に富んでいる。それらは從来からの「往来物」の教育性を残しつつ、西欧の文化・最新の科学への知識欲や、流行の風俗・遊びなどへの好奇心をも満たすものであった。「池田コレクション」の絵本は、大部分地本問屋系の出版社から発行され、色鮮やかに印刷された安価なものであったが、その「尽くし」的表現形式には、子ども達へのサービス精神と尽きることのない大衆文化のエネルギーが横溢していたのである。

●ジャン・ビエンコフスキイ『おばけやしき』論

小澤佐季子（梅花女子大学）

〈発表要旨〉

ジャン・ビエンコフスキイによる仕掛け絵本『おばけやしき』は、梅花幼稚園絵本クラブ「こうめ文庫」の園児達の間で最も人気のある絵本である。この本をめぐってケンカになることも多く、なかなか借りることができない憧れの本となっている。その人気の高さは、貸出ランキングに数字として現れており、1998年度から2001年度にかけて4年間上位を占めている。読み手が大人で、大人のペースで話が進んでいくことの多い物語絵本とは違い、「おばけやしき」は、子ども同士・子ども自身が読んだり、ひとりでのぞきこむことが多いのも特徴である。大人と一緒に読んでいても、仕掛けを動かすのは子ども自身で、大人はそれを見守る役目を担っている。また、この本を読んでいるうちに、悲鳴をあげたり、興奮してくる子が多い。

これほどまでに子どもが魅きつけられる理由として考えられるのは、引っ張ったり開いたりする単純な「仕掛け」だけではなく、作品構造・隠しテーマなど作者が巧妙に表現した「仕掛け」が子ども心理に適しているからである。本発表では、これまでの文庫活動での実践を参考にしながら、集団のなかでの「おばけやしき」の受容と、園児にとっての人気の秘密について考察する。

●教材としての「文字なし絵本」の効用

金澤延美（駒沢女子短期大学）

〈発表要旨〉

「絵本」は子どものためのもので大人には関わりがない、と思っている学生（大人）が多い。短大の授業のなかで、英語絵本とその翻訳絵本との読み聞かせをした後、「絵」について質問をしたところ、読み聞かせ中ほとんど絵を見ず字の部分を見て読んでいたのである。

絵本は老若男女を問わずみんなが関心を持ち、身近に入手しやすい教材である。短大保育科で「英語コミュニケーション」担当になった時、リーディング、ライティング、発音矯正指導等を学



生にとって親しみやすい絵本を利用しながら行うという実践を試みることにした。特に、ライティングに関しては、学生のストーリー作りのためのイマジネーションを膨らませたいと考えた。絵に対する関心を強調し表現力を引き出すための教材として、「字のない絵本」を採用した。

活用実践は以下の通りである。

1. ストーリー作り

各学生が1冊ずつ「文字なし絵本」を選択し、日本語と英語でそれぞれ別のストーリーを完成させる。

2. 創作絵本作り

原本の続きを考えて、絵とストーリーをつけて、完成させる。

3. 読み聞かせ（グループ内）

4～5人のグループを作り、各グループで各自作成の日本語、英語のストーリーを互いに読み聞かせをし、アドバイスし合って文章を修正する。

4. 読み聞かせ（クラスで）

自薦他薦により、各完成したストーリーをクラスで発表する。

アンケート調査から、「文字なし絵本」の教材化を通して、次のような学生の反応を得た。

1. 絵本の「絵」をよく見ることができるようになった。

2. 絵を読むことが出来ることがわかった。

3. 読み聞かせから文章の推敲の大切さがわかった。

2年間の実践を通して、短大、大学レベルの「英語コミュニケーション」あるいは教員養成関連講座等の教材の1つとして、絵本の利用価値の高いことが分かった。本研究発表では、指導方法、およびその成果と問題点について報告する。

■B室 座長：生田美秋・今井良朗

● 「あめのひのおるすばん」が拓いた“感じる絵本”の世界

柴村紀代（藤女子大学）

〈発表要旨〉

岩崎ちひろの『あめのひのおるすばん』（至光社1968）は、至光社の武市八十雄と組んで作られた最初の絵本である。岩崎ちひろと武市八十雄の関係は通常の絵本作りにおける画家と編集者の関係よりもより濃密な共同作業が行われた。二人が熱海の旅館に5日間宿泊し、今までの日本にない新しい絵本を目指して、手探りの状態からこの絵本を作り上げたことはよく知られている。その折、二人は以下のことを確認したという。

1) 画集でも物語の挿絵でもなく、絵本にしかできない絵本の世界を作ろう。2) 感じを感じさせる絵本。3) 説明を省いた引き算の絵本。4) 絵本全体を一枚の絵とする勢いのある絵本。5) 絵と文の底にかくし味をこめる。

これらの試みが、読者から見たときどのように感じとれるものなのか。それを考える一方法として、絵本の文を隠して絵だけを見て、そこに自分ならどんな文を入れるかをアンケート形式で行ってみた。これによって読者は通常の絵と文から成り立っている絵本の情報から切り離され、絵の配列や絵に描かれたものと描かれなかったものを改めて認識するようになる。又、自分の書いた文と絵本につけられた文との違いから、文も又、絵本の流れを作る大切な要素であることに気づかされる。今回の発表では、アンケートの分析を通して、『あめのひのおるすばん』に仕込まれた“感じる絵本”的要素を具体的に考察してみたいと思っている。

● 一画面内の動きの表現

中川素子（文教大学）

〈発表要旨〉

絵本はページをめくることが表現の大切な要素と考えられ、めくることによる複数画面の変化をモンタージュ論で読みといたりするが、一画面内での動きの表現については、あまり論じられることがない。

また、絵本と漫画やアニメーションは動きに対していくつか共通の表現をもっているにもかかわらず、絵本はいかに漫画やアニメーションより優れているか口にされることが多かった。最近そういう風潮はなくなってきたものの同次元で表現研究をすることは少ない。

しかし、一画面内の動きの表現は、絵本全体の表現力に強く関わることであり、また他分野との共通性を考える上でも見逃せない。

い。この発表では、絵本作家たちがいかに動きの表現を工夫しているか、いくつか実例をあげるにとどめるが、その多様性から表現の豊かさを感じていただければと思う。

マイブリッジなどの連続写真、動きの軌跡を一画面におさめた未来派絵画、多視点が動きをさそうキュビズム絵画や人物に中割り的描写をほどこしたマルセル・デュシャン、動かないとされた彫刻にモビールやシーリングで動きを与えたカルダーやムナーリ、イリュージョンで動きを見せるオプ・アート、最初から動きが組み込まれたキネティック・アートやテクノロジー・アートなど、美術の中で動きは魅力的な表現として追求されてきている。

発表時にスライドでお見せするが、絵本での動きもそれらや映像の影響を受けると共に、独自の表現もみせている。1.連続する絵やアニメの中割り的描写、2.一画面内を一巡させたりする異時同図、3.スピードを表現するため後ろに流す線、4.ゼログラフィで形をひっぱる描写、5.極端なデフォルメや短縮法、6.走っていることを表す記号化されたたくさんの手足、7.ホログラム、8.錯視による動き、9.スピードや感情など動きの意味性やイメージをもつ物体や動作や方向、10.ポップアップブックなど仕掛けによる動きなどさまざまである。

●「ページをめくる」ことの意味を基準として、絵本の分類を試みる

千田篤（絵本研究家）

〈発表要旨〉

絵本には様々な種類があり、それらは、いろいろな基準で分類されています。

しかしこまでの分類は、絵本の主題や表現技法、あるいは構造上の特徴を基準にした分類がおもだったといってよいでしょう。

そこで、こうした従来の分類基準とは異なる視点からの分類があるのではないか、その新しい分類が絵本の新しい可能性を示唆するのではないか、というのが発表の狙いです。

ちなみに、絵本には、いくつかの特徴があります。

例えば、1複製芸術 2絵と文章の補完的関係 3ページをめくるという動作 などです。

これらの特徴のうち、私は「ページをめくる」という点に着目してみます。

すなわち、絵本の作者がこの特徴をどのように活用しているかという視点から、絵本の分類を試みます。

その結果、次のような6種類に分類することが可能なのではないかと考えてみました。

6種類の分類の型および、その拠り所となる作品は、次のとおりです。

- 1.「あらし」型…『あらしのよるに』
- 2.「きり」型……『きりのなかのサーカス』
- 3.「ぼく」型……『ぼくとおれるよ』
- 4.「サーカス」型『CIRCUS』
- 5.「迷路」型……『穴あき迷路の本』
- 6.「絵巻」型……日本古来の絵巻物

●4出版社の『のうさぎのフルー』比較

—「絵の並べ替え」からの問題提起—

成田順子（主婦）

〈発表要旨〉

『のうさぎのフルー』（リダ文・ロジャンコフスキエ絵）は、カストール画帖の一冊として1935年にフランスのFlammarionから出

版された評価の高い石版印刷の絵本である。この絵本は複数の翻訳版が出版されているが、絵本の姿は様々である。

1) FROUX LE LIEVRE (Texte de Lida, Images de Rojankovsky, Ernest Flammarion, Paris, 1935)

2) FLUFF THE LITTLE WILD RABBIT (Translated By Georges Duplaix, HARPER & BROTHERS PUBLISHERS, New York & London, 1937)

3) 『のうさぎのフルー』(石井桃子・大村百合子訳,福音館書店, 東京, 1964)

4) 『野うさぎのフルー』(石井桃子訳編,童話館出版,長崎, 2002)

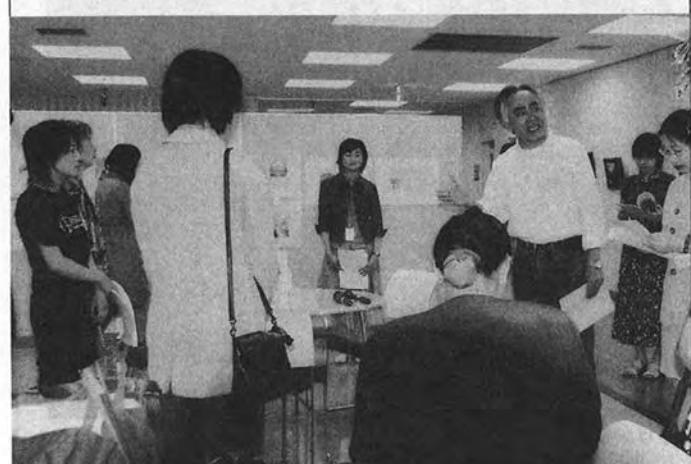
以上4社版を比較すると、まず、HARPER & BROTHERS版はFlammarion版の絵を並べ替えていることがわかる。福音館版はFlammarion版の丁寧な再現で、絵の並べ替えはない。童話館版はHARPER & BROTHERS版から版をとり、更に絵の順番や構成を変えている。童話館版で、Flammarion版の絵がどのように並んでいるかというと、扉頁はFlammarion版のp7、次頁は奥付に変更、以下3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 1 (部分) と 16 (部分), 16 (部分), 20, 25, 19, 22, 34, 24, 26, 27, 28, 21 (部分) と 29, 30, 2, 31, 17, 18, 33, 35, 32である。童話館版のテキストと絵の関係は、本来の原書であるFlammarion版とは違うものとなり、デザイン上の絵と文字の関係も変わっている。また、童話館版は「復刊」とあるが、福音館版とも違う姿である。

絵本の「復刊」とはどういう意味か、「原書」とは何を指すのか。絵本を語る言葉の意味は共有されているのだろうか。また、絵本は絵をパーツとみる並べ替え自由のアートなのか。タイトルだけで絵本を特定し、絵本を語ることに無理はないのか。現著者が形にした絵本は、完成した一つのアートではないのだろうか。これらについて、問題提起したい。

作品発表

座長：笹本純 加持ゆか

- 「なつはやっぱりかきごおり」
藤田和子（穴吹デザインカレッジ講師）
- 「うたたね天使」
村上祐喜子（手作り絵本・夢工房主宰）
- 「Carnival（カーニバル）」
正木賢一（東京学芸大学講師）
- 「海猫」
宮崎詠美（京都市立芸術大学大学院）
- 「どうぶつ」
鈴木文枝（作家）
- 「りんごと1本の線」
東山直美（美遊空間主宰）
- 「子ぞうのスラタラ」
春日和歌子（明治図書出版勤務）
- 「こどものおわり」
玉七穂子（筑波大学芸術専門学群4年）
- 「おうさまのひげ」
西村もも（梅花女子大学児童文学科4年）



ラウンドテーブル



ラウンドテーブル1



ラウンドテーブル2



ラウンドテーブル3

■ラウンドテーブル1 「作家研究」

武井武雄の世界

話題提供者 中村悦子（大妻女子大学・非）

村榮喜代子（京都女子大学）

飯澤文夫（明治大学）

コーディネーター 棚橋美代子（中京女子大学）

武井武雄の世界の一端を、童画・玩具・刺繡と書誌の支店から明らかにし、今後の研究課題を探ることを目的として、このラウンドテーブルが開かれました。

中村さんは、「『コドモノクニ』総目録」を作成しておられ、その基礎的研究をもとに語ってくださいました。武井の果たした役割は、子どものために絵を描く画家たちを結集したことによる意味があり、それを実現した媒体が「コドモノクニ」で、後の武井の世界の芽がある。創刊号の横顔で足を投げ出した姿勢の少女や題字に、目の中にさらに目が描かれた場面等々にすぐれたデザイン性や独自性をみることが出来る。そして彼が命名したといわれる「童画」の世界を確立していくが絵本と絵雑誌の境界線を明確に持っていたわけではないだろう。さらに当時の印刷技術を踏まえた研究の重要性も指摘されました。

村榮さんは、武井の玩具を復元し制作の工程のなかから彼の玩具観を探ろうとしてくださいました。武井が郷土玩具に興味を持ったのは、あるドイツ人にロシアと日本は郷土玩具大国だと評価されたこと、大正期の児童文化運動のなかで玩具が忘れられていること、赤ん坊がまず興味を持つのが玩具であること等だが、自ら郷土玩具・民族玩具を生み出したいという気持ちがあったと思われます。それは子どもの誕生・成長や家族への思いが大きい。玩具は「Rデコ」「BELL KNOCKER」「MODERN BOY」の3点が復元され、武井の設計図と比較しながら制作過程での発見・デザイン・からくりについて紹介されました。武井の刺繡については、山田紀子さんから話していただきました。

飯澤さんは、武井の情報はイルフ童画館で聞けば全てわかるという状態にしてほしいという願いから、研究の基礎である武井武雄書誌作成を始められました。武井は多様な業績を指摘されていますが、辞書・事典類のなかでは画家という評価が欠落しているものが多いなど、研究は不十分です。まず武井のみでなく、影響を与えたり与えられたりした人々にも目配りをしていかなくてはなりません。また、「童画」という言葉を彼が何時から使用し始めたのかという点についても2説あり、混乱しています。現物の確認をせず、不用意な引用・孫引きによる問題は戒めなければならない。武井の詳細な年譜・年表は一つ一つ根拠が示された正確なもの、交遊関係を含む総合的なものを作成していきたいと語られました。

話題提供の後の質疑応答・討論も活発で、それぞれの話題がさらに深まりました。絵雑誌・絵本研究には原画制作と印刷時期のずれを明らかにすること・作品制作過程での画家と印刷技術者の見極めが必要等、研究姿勢の根源に関わる問題に触れることが出来たと思います。

(文責：棚橋美代子)

■ラウンドテーブル2 「絵本と地域活動」

絵本美術館を楽しむ

話題提供者 荒木禎子（元高校司書）
浜田桂子（絵本作家）
磯村あづさ（軽井沢絵本の森美術館学芸員）
コーディネーター 酒井倫子（絵本美術館 森のおうち館長）

冒頭、本大会の大会テーマにのっとって行われた「絵本と絵本美術館」の概要をコーディネータから報告、本題に入りました。

まず、話題提供者の磯村あづさ学芸員より、欧米の絵本の大際に優れた企画で定評のある軽井沢絵本の森美術館の歴史と現状とともに、来館者のアンケートから、「心の安らぎ」「懐かしさ」「新しい知識」等、来館者ニーズの全般的な傾向が話されました。

次いで、絵本作家の浜田桂子さんより、原画の意味について、1) たったひとつのかけがえがないもの 2) 作家が向かい合った時間がそのまま凝縮されたものであることなどが上げられ、原画でしか見られない、画面の風合い、色などを観てもらう意義が語されました。

展示については、1) 絵本は、めくることを意識して描かれてるので、表紙から裏表紙まで流れに添って、全点展示して欲しい。2) 子どもの目の高さを意識して展示して欲しい。3) ダミー本からは作家の深い想いや制作の秘密、価値観などが見てもらえるなどが話されました。

次いで荒木さんより、長年高校の司書を勤めてこられた経験から、美術館も図書館もハードよりも、施設に携わるものとの構え、熱意が大切で、その中で利用者は育ち、館側も学ぶ生き生きとした相互関係が必要と提案されました。

それを受け、フロアからも貴重な意見が出されました。まず、香曾我部さん（インディペンデント・キューライター）より、美術館の役割で最も大切なのは、価値観の創造と継承であり、それに取り組む哲学が必要であり、癒しや一時の楽しみだけをねらったのでは、その役割は果たせないという意見が出されました。

それに対して、安曇野ちひろ美術館の竹迫さんが今日、特に現代美術を対象とする場合、美術館での価値判断が曖昧である場合が多く、また、価値も多様化してきている絵本美術館は、残すべきものの価値を探りつつ、敷居を低くして楽しく親しみの持てる美術館作りをしていくことが大切で、そうした意味合いからも、リラクゼーションと言う側面は大きいと発言。また、三宅さんからは、ミュンヘンの国際児童図書館の創立者レップマン氏より学び、参加型の美術館つくり、即ち恒常的なテーマで参加者にインスピレーションをわかせるイベント作りが大切との提案がなされました。それに対してフロアからはたくさんの賛同の声が上がりました。また、世田谷文学館の生田さんから、開かれた館づくりの具体例が示され、地域文化を高めてゆくコーディネーターとして、絵本美術館や文学館の役割が強調されました。軽井沢絵本の森美術館の土屋さんから、「地域そのまま美術館」やエコミュージアム作りに取り組む軽井沢町の経験が話されました。また、コーディネーターより安曇野における「安曇野アートライン」の開かれた美術館づくりの報告をし、絵本美術館に関する様々な意見交換をしてゆこうと参加者に提案しつつ、ラウンドテーブル2の幕を閉じました。

（文責：酒井倫子）

■ラウンドテーブル3 「絵本受容研究」

絵本を結ぶ 絵本と遊ぶ

話題提供者 西内ミナミ（絵本作家、ぐるんば文庫）
大沢洋子（飯田市立上郷図書館長）
コーディネーター 越高一夫
(子どもの本専門店「ちいさなおうち」主宰)

今回のラウンドテーブルでは、絵本と出会う場所としてどんな場所があり、そこでは、子どもと絵本を楽しむ方法として、どんなことが行われているかをさぐるため、「絵本を結ぶ 絵本と遊ぶ」という切り口から「絵本受容」について考えてみました。まず、子どもが絵本と出会う場所として、「家庭文庫」「図書館の児童室」「子どもの本の専門店」を取り上げ、そこからの現状報告からはじめました。

最初は、絵本作家として有名な西内ミナミさん。「ぐるんば文庫」の活動や文庫に来る子どもたちの変化、杉並区民センターの図書室の役割などについて報告。文庫は、「子どもと本を結ぶ場」として、大きな役割を果たしていましたが、最近は忙しい毎日を送る子どもたちにとって、利用する上で不便な点もあり、来る子どもの数は減っています。しかし、区民センターに図書室が出来たことで、今まで通り子どもと本が場所が確保されているのだから、仕方のないことでもあります。

また、「絵本と遊ぶ」活動として、文庫では「おはなしの会」を盛んにやってきました。そして、その活動は今、区内の児童室などに出かけて行う、出前の「おはなし会」としても広がりを見せています。そこで、絵本作家の立場から「おはなしの会」でよく利用されている「絵本を拡大」したり、「カラーコピー」をしたりすることは、著作権という法に違反していることを考えて欲しいと問題提起が行われました。この問題は、討議の時間でも、それぞれの立場から発言があり、「絵本の大型化」「スライド化」なども含めて、出版者や著作権に了解を得てから使用したいことを確認しました。

次に飯田市立上郷図書館長の下沢洋子さんが登場、図書館の児童室での活動に併せて市で取り組んでいる読書支援活動「よむとすいだ」の実践を報告。具体的には週一回行なわれている「おはなし会」の他、ブックスタート時に絵本を贈る場での読み聞かせの様子、学校や保育園に出かけて行なっている「おはなし会」の演目などの実演を交えながら披露されました。参加者はここでたっぷりと「読み聞かせ」の体験をすることが出来、大好評でした。

最後には、子どもの本の専門店「ちいさいおうち」の店長であり、この分科会のコーディネーターである越戸一夫より、子どもの本の専門店として行なってきた「絵本の専門講座」が紹介されました。これは、子どもの本の周辺にいる大人に、絵本の世界を深く知ることで、より楽しんでほしいという願いをこめて企画、講師には吉田新一氏を迎えて、連続5回の講座で行なったものです。また、文庫や図書館から本を「借りる」ということと、書店で「買う」ということでは、選書眼の厳しさに大きな違いがあり、子どもは欲しい本をなかなか買ってもらえない現状があるとえました。

「絵本と遊ぶ」こととして考えられる「読み聞かせ」等の活動を通して、「絵本と子どもを結ぶ」方法を考えることは、これからも繰返される「絵本需要研究」の重要なテーマであると思います。（文責：越戸一夫）

ワークショップ

■ワークショップ1

武井武雄デザインを学ぶモビール作り

講師：岡田忠之（中京女子大学）

現代彫刻（オブジェ）のひとつであるモビールは、風や空気の流れなどで動いて、さまざまに形を変化させます。ここでは、紙やダンボールを使って、参加者が武井武雄のデザインメソッドでデザインして、モビール作りに取り組みました。



■ワークショップ2

武井武雄も学んだ「からくり玩具」を作ろう

講師：村榮喜代子（京都女子大学）

武井武雄の設計した、ひもを使ったからくり玩具に、「Rデコ」や「BELL KNOCKER」「もだん・ほおい」などがあります。今回は、ひもを使ったからくり玩具「ぱたぱた人形」を、竹材で作りました。



絵本学会第6回定期総会

日時：2003年6月15日（日）午後12:00～13:00

場所：イルフプラザ生涯学習館（多目的ホール）

出席者：出席者51名・委任状90名

議長：香曾我部秀幸 書記：石井光恵

1. 開会の辞

竹迫祐子委員より開会の辞が述べられた。

2. 会長挨拶

三宅興子会長より、第6回定期総会開催に当たって挨拶が述べられた。

3. 役員人事に関する件

役員候補者選出の経緯が今井事務局長より説明され、総会資料に基づき役員人事案が検討された。審議の結果、下記役員人事が承認された。また、理事1名の未定な件については、その決定を理事会に一任することが了承された。

理事・会長 今井良朗（武蔵野美術大学）

理事・事務局長 笹本 純（筑波大学）

理事 太田大八（作家）

理事 中川素子（文教大学）

理事 松本 猛（ちひろ美術館）

理事 三宅興子（梅花女子大学）

理事 未定

監事 千田 篤（公認会計士）

監事 増成隆士（筑波大学）

顧問 亀田邦子（日本国際児童図書評議会）

顧問 島 多代（国際児童図書評議会）

顧問 松居 直（児童文学家）

運営委員 石井光恵（日本女子大学）

生田美秋（世田谷文学館）

今井良朗（武蔵野美術大学）

太田大八（作家）

香曾我部秀幸（インディペンデント・キュレーター）

佐々木宏子（鳴門教育大学）

笹本 純（筑波大学）

竹迫祐子（安曇野ちひろ美術館）

松岡希代子（板橋区立美術館）

三宅興子（梅花女子大学）

4. 会則の一部改正に関する件

会則の一部改正案が今井事務局長より説明され、検討の結果、下記のように改正されることが承認された。

〈旧〉

第9条（専門委員会）

本会に次の委員会を置く。

1. 企画委員会

2. 出版・編集委員会

3. 広報委員会

4. 必要に応じて会長は、臨時の委員会を設置することができる。

5. 各委員および委員長は、理事会の議を経て会長が委嘱する。

6. 会長の任命により、各委員会の委員1名は事務局を担当する。

《新》

第9条（専門委員会）
本会に次の委員会を置く。

1. 企画委員会
2. 紀要編集委員会
3. 機関誌編集委員会
4. 研究委員会
5. 広報委員会
6. 必要に応じて会長は、臨時の委員会を設置することがある。
7. 各委員および委員長は、理事会の議を経て会長が委嘱する。
8. 会長の任命により、各委員会の委員1名は事務を担当する。

5. 2002年度活動報告に関する件

生田美秋委員より、総会資料に基づき下記のような2002年度活動報告がなされ、承認された。

○2002年度活動報告

○第5回絵本学会大会

6月29日、6月30日、神戸ファッショング美術館
テーマ：「絵本はコラボレーションの場」

○理事会・運営委員会

4月14日 運営委員会
5月19日 運営委員会
6月29日 理事会
7月30日 運営委員会
10月12日 運営委員会
12月8日 拡大運営委員会
2月2日 理事会
2月8日 運営委員会
3月30日 運営委員会

○広報

広報紙『絵本学会ニュース』の発行 5月、9月、11月

○企画

絵本フォーラム02「再度、昔話絵本を考える」の開催 8月15日

○研究

研究活動への支援 3件

- ・戦後60周年子ども文化プロジェクト
代表者：正置友子
 - ・日本絵本史研究会
代表者：大橋真由美
 - ・幼稚園児と絵本の関わり－梅花幼稚園絵本クラブ「こうめ文庫」10年の活動記録からの考察
代表：小澤佐季子
- 「絵本画家による絵本論」文献解題
2002年度絵本参考文献目録の作成

○出版

絵本学会研究紀要『絵本学』第5号の刊行

機関誌『ブックエンド』創刊号の発行

○役員改選

2003年度役員改選に伴う新運営委員候補選出選挙、理事候補の選出

○その他

理事会の諮問機関として会則検討委員会の発足
委員長：増成 隆士

6. 2002年度会計・会計監査報告に関する件

2002年度決算書に基づき、今井事務局長から2002年度の会計報告がなされ、監査担当の千田篤氏より、監査の結果適正と認める旨の報告がなされた。審議の結果、2002年度の決算報告（別紙）が承認された。

7. 2003年度活動計画に関する件

総会資料の2003年度活動計画案に基づき、会長より2003年度の活動計画について説明がなされ、下記2003年度活動計画が承認された。また、第7回絵本学会大会が、来年6月に長崎県の活水女子大学で開催される予定であることが報告された。

○2003年度活動計画

○第6回絵本学会大会

6月14日、6月15日、長野県岡谷市カノラホール・イルフプラザ生涯学習館／テーマ：「絵本と絵本美術館」

○広報

広報紙『絵本学会ニュース』の発行 5月、8月、12月

○企画

絵本フォーラム03 「赤ちゃんと絵本のために、今大切なこと ファーストブックとブックスタート」の開催 8月23日
連続講座「絵本研究の現状と課題」の開催

○研究

研究活動の推進
研究活動への支援
2003年度絵本参考文献目録の作成

○出版

絵本学会研究紀要『絵本学』第6号の刊行
機関誌『ブックエンド』2号の発行

○その他

会則の検討
会員名簿の発行

8. 2003年度予算に関する件

今井事務局長より、総会資料の2003年度予算書（案・別紙）に基づいて、予算案についての説明がなされ、審議の結果、原案通り2003年度予算が承認された。

9. 会則の検討に関する件

会則検討委員会（今井良朗、亀田邦子、中川素子、松岡希代子、増成隆士委員）の増成隆士委員長より、会則の検討についての進捗状況が報告された。

現段階の報告として、まず各委員の基本的な考え方、現状認識、あるいは改定案のコンセプト、骨子等話し合いで出されているものが紹介された。また、7月末日までに会員より意見や提言を検討委員会委員長宛てに寄せていただき、その後、会則改定案の成案に向けて検討を進めていくことが伝えられた。

10. 閉会の辞

三宅興子会長より、会長退任に伴う挨拶があり、統いて新会長となる今井良朗委員、及び、新事務局長となる笹本純委員からも挨拶があった。

第6回大会実行委員の竹迫祐子委員より閉会の辞が述べられ閉会した。

●2002年度決算書

2002年4月1日～2003年3月31日

絵本学会

[収入] 項目	予算額	決算額	増減	摘要
会費収入	3048000	2544000	-504000	賛助会員11口×22,000円
法人等会費	300000	220000	-80000	正会員284名×8,000円
個人会費	2748000	2324000	-424000	準会員13名×4,000円
利息収入	100	18	-82	
貯金利息	100	18	-82	
参加費収入	350000	697800	347800	
大会参加費	300000	587800	287800	
フォーラム等参加費	50000	110000	60000	
積立金組み入れ	1000000	1000000	0	
その他収入(入会金等)	100000	131200	31200	
前年度繰越金	686175	686175	0	
合計	5584275	5059193	-525082	

[支出] 項目	予算額	決算額	増減	摘要
運営費支出	500000	941002	-441002	
総会・大会費	250000	575502	-325502	印刷費・通信費など含む
大会運営補助費	250000	365500	-115500	会場使用料を含む
活動費支出	200000	90000	110000	
専門委員会活動費	110000	0	110000	
その他活動費	90000	90000	0	
旅費・交通費	400000	438897	-38897	委員出張・講師交通費
謝金支出	200000	150000	50000	
講師謝礼	100000	50000	50000	
紀要編集・制作費	100000	100000	0	
機関誌刊行費支出	1000000	200000	800000	
印刷費支出	870000	560935	309065	
絵本学会ニュース	350000	162750	187250	
研究紀要	250000	202125	47875	
会員名簿作成費	70000	0	70000	
その他	200000	196060	3940	
消耗品費支出	50000	8998	41002	事務消耗品費
通信費支出	430000	506530	-76530	ニュース、紀要等発送費、事務連絡費
報酬支出	350000	300400	49600	
事務局報酬	350000	300400	49600	事務局1名+アルバイト
会議費	50000	13588	36412	
雑費	30000	15175	14825	
予備費	50000	0	50000	
機関誌刊行積立金	1400000	1400000	0	
次年度繰越金	54275	433668	-379393	
合計	5584275	5059193	525082	(単位：円)

資産残高明細 2003年3月31日現在

現金 16,098円

UFJ銀行国分寺支店 125,970円

たかの台駅前郵便局 1,691,600円 (内積立金1,400,000円)

●2002年度予算書

2003年4月1日～2004年3月31日

絵本学会

[収入] 項目	前年度予算額	前年度決算額	予算額	摘要
会費収入	3048000	2544000	2672000	賛助会員11口×22,000円
法人等会費	300000	220000	220000	正会員300名×8,000円
個人会費	2748000	2324000	2452000	準会員13名×4,000円
利息収入	100	18	100	
貯金利息	100	18	100	
参加費収入	350000	697800	400000	
大会参加費	300000	587800	300000	
フォーラム等参加費	50000	110000	100000	
積立金組み入れ	1000000	1000000	1400000	
その他収入(入会金等)	100000	131200	120000	
前年度繰越金	686175	686175	433668	
合計	5584275	5059193	5025768	
[支出] 項目	前年度予算額	前年度決算額	予算額	摘要
運営費支出	500000	941002	450000	
総会・大会費	250000	575502	300000	印刷費・通信費など含む
大会運営補助費	250000	365500	150000	
活動費支出	200000	90000	190000	
専門委員会活動費	110000	0	100000	
その他活動費	90000	90000	90000	
旅費・交通費	400000	438897	400000	委員出張・講師交通費
謝金支出	200000	150000	220000	
講師謝礼	100000	50000	100000	
紀要編集・制作費	100000	100000	70000	
チラシ制作費など	0	0	50000	
機関誌刊行費支出	1000000	200000	1000000	
印刷費支出	870000	560935	670000	
絵本学会ニュース	350000	162750	200000	
研究紀要	250000	202125	250000	
会員名簿作成費	70000	0	20000	
その他	200000	196060	200000	
消耗品費支出	50000	8998	20000	事務消耗品費
通信費支出	430000	506530	400000	ニュース、紀要等発送費、事務連絡費
報酬支出	350000	300400	300000	
事務局報酬	350000	300400	300000	事務局1名+アルバイト
会議費	50000	13588	20000	
雑費	30000	15175	20000	
予備費	50000	0	80000	
機関誌刊行積立金	1400000	1400000	1200000	
次年度繰越金	54275	433668	55768	
合計	5584275	5059193	5025768	(単位：円)

絵本関係展覧会イベントInformation

●軽井沢絵本の森美術館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

TEL.0267-48-3340 FAX. 0267-48-2006

<http://www.museen.org/ehon/>

info@museen.org

★つばさの絵本展—描かれた天使とその歴史—

特集：東逸子の幻想空間

会期：2003年6月27日（金）～10月13日（月）

人間は古来、空への憧れをつのらせてきました。人が空を飛ぶために積み重ねてきた試み、また神に近づくためになされてきた努力は、人類の歴史の中でも特筆すべきものであり、それは絵画の中にも見ることができます。

4世紀頃のキリスト教美術には翼のある天使が登場し、神のいる天上界と人間界を自由に行き来する姿が描かれました。彼らはその神秘的な存在ゆえに、絵本の中でもたびたび取り上げられるようになります。現在に至っています。

本展では、「つばさ」をテーマに、絵本の中に登場する天使像にせります。彼らの典型的な姿や歴史をご紹介するほか、特集として想像力あふれる作品を描くイラストレーター東逸子をとりあげ、その魅惑的な幻想空間へとご案内いたします。

<展示構成>

1. 天使が描かれた歴史、天使の特徴

マイケル・ヘイグ、トニー・デ・パオラ、C・ロビンソン他

2. 描かれた天使たち

東逸子「アンジェライト」「翼の時間」

3.写真絵本に登場する天使

宇野亜喜良・沢渡朔「天使のバヴァーヌ」

4.天使の絵本、飛翔が描かれた絵本、愛と平和の絵本

聖書に描かれた天使たち、<飛翔>が描かれた絵本など、
「つばさ」をめぐる多様な世界

★併設展

「木葉井悦子・アフリカの命を見つめる」

会期：同上

風を、雲を生きとし生けるものを、のびのびとした筆づかいで描いた木葉井悦子。1995年に惜しまれつつ亡くなりましたが、彼女の絵本には、生命へのあふれんばかりの愛が力強く表現されています。彼女は2年余りをアフリカで過ごし、その時の体験がのちの絵本作りに大きな影響を与えました。

本展では幻のデビュー作『あかいめのしろへビ』の原画のほか、木葉井がコレクションしたアフリカの民芸品なども公開します。

★次回

「夕と暁と夜の絵本展—物語を流れる時をめぐって—」

絵本を流れる時間を夜・昼・朝・夕に分類し、それぞれの時の特徴を絵本原画によって考察します。

会期：2003年10月17日（金）～2004年1月12日（月）

併設展「新・欧米絵本のあゆみ」展

●エルツおもちゃ博物館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

電話0267(48)3340 fax.0267(48)2006

info@museen.org

★秋冬展

「おもちゃの国のクリスマス～サンタと信仰の冬景色～」

クリスマスを迎えるために必要不可欠なおもちゃや工芸品、サンタクロースをあらわしたおもちゃをご紹介します。

また、サンタクロースについてはそもそもどのような存在であるのかにスポットを当て、ドイツの信仰生活に根ざしたクリスマス風景に迫ります。

会期：2003年10月17日（金）～2004年1月12日（月）

●大島町絵本館

〒939-0283 富山県射水郡大島町鳥取50

TEL : 0766-52-6780 FAX : 0766-52-6777

<http://www.iijnet.or.jp/ehonkan/>

★市田喜一絵本原画展

9月3日（水）～10月29日（水）

美術デザイナーとしてご活躍中の市田喜一さんの絵本原画展です。友達のお孫さん「さらちゃん」「りーちゃん」をヒントに作られたという2冊の絵本「サラウサギの日記」「つちのこりーチャン」他、最新の作品をご紹介いたします。独特のキャラクターの魅力、遊び心あふれる絵本の世界をお楽しみください。

■展示原画 「サラウサギの日記」（桜桃書房）

『つちのこりーチャン』（桜桃書房）

『2004年カレンダー』

『おじいの秩父夜話』

●安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原

TEL. 0261-62-0772／テレフォンガイド 0261-62-0777

FAX 0261-62-0774

<http://www.chihiro.jp/azumino/top.htm>

★ちひろが描いたヒロイン

9/26(金)～11/30(日)

＜企画展＞ちひろ美術館コレクション 日本の絵本画家展

●ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2

TEL 03-3995-0612／テレフォンガイド 03-3995-0820

FAX 03-3995-0680

<http://www.chihiro.jp/tokyo/>

★「少女・母・画家— いわさきちひろ」展

10/1日(水)～11/6(日)

同時開催『こんにちは赤ちゃん』（岩崎書店刊 黒柳徹子・編）

出版記念 ちひろのあかちゃん展

★「ちひろ・絵のなかの物語」展

11/19日(水)～2004年1/31(土)

●イルフ童画館

〒394-0027 長野県岡谷市中央町2-2-1

TEL 0266-24-3319(ミミズク) FAX 0266-21-1620

<http://www.city.okaya.nagano.jp/ilf/>

★第3回武井武雄記念日本童画大賞（イルフエンナーレ）

応募要項

【趣旨】

「童画」を生み出した武井武雄（岡谷市出身）は、大正から昭

和の児童文化興隆期 の優れたリーダーでした。武井は、子どものために生涯にわたって素晴らしい作品を創り続けました。

岡谷市および武井作品を所蔵する日本童画美術館（愛称イルフ童画館）では、武井の「童画」の精神を継承発展させ、さらに21世紀における新しい児童文化の創造を目指して第3回“時空を超えて輝く－武井武雄記念 日本童画大賞”を実施いたします。

【主催】 岡谷市・イルフ童画館（財団法人岡谷市振興公社）

【共催】 信濃毎日新聞社・岡谷市教育委員会

【審査員】 山本容子 遠山繁年 元永定正 二木六徳

【賞】 武井武雄記念 日本童画大賞 1点

100万円(買い上げ)、賞状

最優秀賞(信毎賞) 1点 30万円(買い上げ)、賞状

優秀賞 1点 10万円(買い上げ)、賞状

審査員特別賞 5点 5万円(買い上げ)、賞状

奨励賞 3点 3万円(買い上げ)、賞状

入選 30点程度 記念品、賞状

【応募締切】 2003年10月19日(日)必着

【応募資格】 高校生以上、40歳以下

【作品規定】

・趣旨に沿った作品で、一人1~2点以内、未発表のものに限る。

・作品規格 平面で紙を主体(イラストボードは可)用紙はA2判(たて420×よこ594mm)で余白なしとする。

・額装不要

【出品料】 1点：3,000円 2点：4,000円

*入金された出品料は返金できませんのでご了承ください。

【応募方法】 詳細は応募要項をご覧ください。

要項をお取り寄せの場合は、200円切手を同封のうえ、ご請求ください。

【審査発表】 2003年11月19日(水)までに入賞者に直接通知します。

【応募先・問合せ先・請求先】

〒394-0027 長野県岡谷市中央町2-2-1 イルフ童画館

「日本童画大賞展」係

*買上げ作品の所有権及び著作権並びに入選作品の本展関係の出版物への版権は主催者に帰属します。

*童画大賞作品展：2003年11月19日(水)～11月23日(日)

会場：カノラホール小ホール

●国立国会図書館国際子ども図書館

〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49

Tel. 03-3827-2053 Fax. 03-3827-2043

<http://www.kodomo.go.jp>

★「児童文学にえがかれた冒險／未知の世界へ」展

7/19(土)～11/9(日)

第1部：冒險小説の誕生

第2部：さまざまな冒險

●世界のバリアフリー絵本展

主催：JBBY 日本国際児童図書評議会 日本ユニセフ協会

後援：絵本学会

◆これらの絵本は、IBBY障害児図書資料センターが、長年にわたり世界中から収集した4000冊のなかから、IBBY50周年を記念し、センターのほうで17ヶ国、43タイトルの本をセレクトし絵本展示企画したもの。

絵本はその内容により9ジャンルに分けられています。

◎テキストがサイン(手話など)でかかれている本

◎BLISSやPictogramsが付いている本

◎さわる絵本

◎一般の市販本に点字をつけた本

◎音の描かれている絵本に音声をつけた本

◎「やさしく読める本」として特別に作られた本

◎障害のある人物が描かれている本

◎障害のある人たちのアート・文学作品を収めた本

◎一般の市販本の中で障害を越えてみなが楽しめ要素をもつ絵本

またセレクトにあたっては、こうした絵本の歴史上重要な役割を果たしたものや現在あるさまざまな種類を考慮し、さらには、出来るだけいろいろな国から選本されています。

なによりも、どの絵本も「障害」のあるなしに関わらず、「障害」を越えてともに楽しめるように工夫されており、ノーマライゼーションの理念が43タイトルの絵本を通じメッセージされています。

日本巡回にあたりましては、こうした本の存在や必要性を皆様に知っていただき、日本ではまだほとんど取り組まれてない分野の本も、今後研究開発が進み、普及されていきますことを願っております。

なお、上記の本以外に国内のバリアフリー絵本も展示されます。

◆開催地(2003.12月分まで)

東京都品川区ゲートシティ大崎 ゲートシティホール

8月2,3日

大分県湯布院町こども童話館 8月13日～27日

兵庫県三田市有馬富士自然学習センター 10月13日～19日

東京都庁 10月25、26日

絵本ワールドinとっとり(米子コンベンションセンター ピックアップ) 11月15, 16日

熊本市青年会館 11月26日～12月2日

*場所等は変更になることもありますので、詳細等はお問い合わせください。

◆開催場所は公募しています

開催条件：展示会場や会場内スタッフの確保できる団体

開催期間：2003年8月から2年間(ひとつの開催団体の開催期間は最大2週間)

費用：企画手数料5万円+展示物送料

*独自の企画を加えていただくことはかまいません。

*講演会講師ならびにワークショップ指導者のご紹介をいたします。

*ただし、それらに関わる一切の費用は開催者負担となります。

*詳しくは開催要項をご請求ください。

◆問い合わせ先/連絡先

世界のバリアフリー絵本展実行委員会

〒162-0828 東京都新宿区袋町6番地日本出版クラブ2F

JBBY事務局

TEL 03-5228-0051 FAX 03-5228-0053

伝言板

●『子どもの本WAVE』のご案内

今、北から南の、小さな街でも、大きな街でも、子どもと本をむすぶさまざまな活動が広がっています。子どもと楽しんだ絵本のこと、わくわく心はずませた本の話、そのでいいや発見を交流しあってみたいものです。子どもたちの明るい未来のために、子どもの本から広がるゆたかな波を、大きなうねりにしていきましょう。

子どもの本WAVEは、子どもの本が好きな人なら、誰でも入れます。子どもの本や文化活動の情報収集・発信をおこない、子どもと本をつないでいきます。

◎活動内容

- ・全国の情報を集めたニュースを発行
- ・機関誌の発行
- ・子どもの本に関する情報交換のイベントを開催
- ・年に1回の大会の主宰

◎会員の特典

- ・「ニュースWAVE」に情報を寄せることができます。
- ・「ニュースWAVE」の配付を受けます。
- ・子どもの本WAVEのイベントに優先的に参加できます。

◎会費について

- ・入会金1,000円
- ・年会費（4月～翌年3月まで）3,000円
- ・（機関誌は別料金となります）

◆問合せ先：

子どもの本WAVE事務局
〒130-0021 東京都墨田区緑1-21-11
Tel/Fax 03-3633-8548
E-mail : home@kodomonohonwave.com

事務局からのお知らせ

●研究助成について

今年度も絵本研究に関する研究会などグループの活動を助成します。助成金は、一件あたり30,000円とし、平成15年度は、3件について助成します。助成を希望するグループは、研究テーマ・研究の概要・研究代表者および構成員・発表の形態を明記し、10月20日（必着）までに絵本学会事務局宛に郵送してください。結果は、運営委員会・理事会で審査の上お知らせします。

●第7回絵本学会大会（2004年度）開催のご案内

第7回絵本学会大会は、2004年6月12日（土）・13日（日）の2日間、活水女子大学（長崎県長崎市）で開催することが決まりました。大会プログラムなど詳細は、次号のニュースでお知らせいたします。

●運営委員会

5月11日 運営委員会 於：板橋区立企業活性化センター

議題

1. 4月6日開催理事会の報告
 2. 各委員会からの報告
 - ・出版編集・紀要委員会
紀要編集印刷状況について
紀要のあり方について
審査手続きの検討
質の高い原稿を集める努力の必要性
 - ・広報委員会 なし
 - ・研究委員会 なし
 - ・企画委員会
講師登録制について
絵本フォーラムについて（赤ちゃん絵本とブックスタート）
 3. 平成14年度会計報告
絵本学会2002年度収入状況、2002年度決算書（案）、平成14年度会計報告について検討
また、会費納入者が減少傾向にあることも併せて報告された。
 4. 平成15年度予算案について
平成15年度予算案について検討
 5. 平成14年度活動の総括と引き継ぎ事項について
 6. 第6回絵本学会大会プログラムの最終確認
 7. 第6回絵本学会大会の進行について
 8. 平成15年度総会の議案について
 - (1) 総会では、会則の一部変更（第9条の専門委員会の変更）を提案する
 - (2) 会則検討委員会で今後の会則の検討を行なう。
 9. 企画委員会からの提案
連続講座についての企画案の説明、生田委員より。今後さらに新企画委員会で検討を加えていく。
 10. 「BOOK END」の編集体制について
- 5月11日 新運営委員会 於：板橋区立企業活性化センター
- 議題
1. 理事の選出について
運営委員会から、三宅、笹本、今井、太田、他に中川、松本氏にお願いすることになった。

専門委員会から

●企画委員会

企画委員会の委員を募集します。絵本フォーラム、連続講座などの企画、運営が主な業務です。委員会は年間4～6回開催します。絵本表現研究、絵本史研究、作家論・作品論、海外の絵本研究に関心のある会員の応募をお待ちしています。申し込みは事務局まで。

●紀要編集委員会

本年5月にお届けした研究紀要『絵本学』第5号の中に、下の様な誤植がありました。執筆者ならびに会員の皆様にご迷惑をお掛けしました。お詫び申し上げます。

恐縮ですが、ご訂正下さいます様お願ひいたします。

★訂正箇所 目次頁2行目

（誤）未完絵本 → （正）未刊絵本

2. 平成15年度の活動について
 - ・各委員会の充実
 - ・会長任命の運営委員の候補者を検討
 - ・各委員会の担当者を検討
 - ・紀要の発行、機関誌『BOOK END』の刊行を継続
3. 『BOOK END』の編集体制について

7月5日 運営委員会 於：板橋区立企業活性化センター
議題

1. 議事録の確認 了承
2. 第6回大会について

竹迫委員より「第6回絵本学会大会報告」に基づいて説明。参加者数417名（内会員86名）。委員の意見は以下の通り。

 - ・参加者も多く全体としては成功。シンポジウムが充実。
 - ・研究発表は低調。今後の検討が必要。
 - ・ラウンドテーブルの評価は会員と一般参加者で分かれた。
 - ・作品発表は作品評価をどうするかという問題が残る。
 - ・大会事務局と運営事務局の打ち合わせが不十分であった。
 - ・ニュースでの報告は、しっかりと記録としてのこすべき。
3. 各委員会の今後の活動について
 - ・企画委員会
委員長は生田委員。スタッフの人選は今後詰める。
絵本フォーラム'03を実施する。
講師登録制の活用を図る。
連続講座をスタートする。
フォーラムの傾向が固定化しているとの批判があり、検討する。
 - ・紀要編集委員会
委員長は三宅委員。他の委員の人選は今後詰める。
査読のあり方を明文化したい。
 - ・機関紙編集委員会
委員長は香曾我部委員。委員の人選は今後詰めていく。
香曾我部が関西在住のため、東京在住の委員の充実を図る。
機関紙の編集プランを委員会から提案。運営委員会で協議した上で編集作業にはいる。
 - ・研究委員会
委員長は中川委員。委員の人選は今後詰めていく。
研究委員会の活性化は絵本学会の最重点課題である。
企画委員会とも連携した活動を展開する。
 - ・広報委員会
委員長は笹本委員。委員の人選は今後検討。
学会ニュースのリニューアルを検討する。
絵本学会と関連する学会、団体との連携強化に努める。
4. 運営委員会人事について

運営委員に加持ゆか、広松由紀子、中川素子の3名を運営委員会として理事会に推薦する。
5. 第7回大会の開催について

長崎の活水女子大学で開催予定。
6. 運営委員会開催のスケジュールについて

年6回を原則とする。

●理事会

5月18日 理事会 於：東京新宿 談話室滝沢

議題：

1. 役員人事について

- 新理事候補として今井・太田・松本・三宅・中川・笹本を確認、残り1名については未定。

会長候補として今井、事務局長候補として笹本を承認。

2. 第6回大会について

運営委員会での検討結果に基づき、第6回大会の内容、進行について確認。

3. 今年度総会について

予算、決算、活動報告、活動計画等の審議予定事項について確認。

4. 『BOOK END』2号の編集について

その理念、内容、編集体制について話し合う。抜本的に見直すべきとの意見もあったが、動き出した流れを継続させつつ新しいあり方を作っていくこととした。担当責任者を早急にきめることが必要。

5. その他

・専門委員会について

出版・編集委員会を、紀要編集委員会および機関誌編集委員会に分けることとする。

・会則の見直しについて

特に、運営委員会、理事会のあり方について意見交換。

6月14日 理事会 於：岡谷市カノラホール

議題

1. 2002年度決算について

2. 次期役員候補について

総会に諮る次期役員候補をあらためて確認、また、もう1名の理事については急いで決めず、新理事会に一任してもらうよう諮ることになった。

3. 次期理事会への申し送り事項と引き継ぎについて

4. その他

次回大会の候補地に上がっていた網走市が、今回も断念するとの意向が伝えられた。

7月19日 理事会 於：東京新宿 談話室滝沢

議題：

1. 第6回大会について

運営委員会に提出された大会報告書に基づき、大会の運営、経緯、問題点などを整理確認した。参加者も多く盛会であり、大会として成功であった。ただし、研究発表の量・質の向上等、今後の課題も残った。また、ツアー実施、ホテル料金設定などで不備もあった。

2. 専門委員会について

運営委員会の提案に基づき、各専門委員会の責任者（委員長）を決定した。今後委員長を中心に活動内容等を詰めていく。

・企画委員会→生田美秋

・紀要編集委員会→三宅興子

・機関紙編集委員会→香曾我部秀幸

・研究委員会→中川素子

・広報委員会→笹本純

3. 役員人事について

会長推薦枠の運営委員として、中川素子、広松由希子、加持ゆか、の3氏を承認した。理事については、当面メンバー追加枠は空けておくこととなった。

4. 第7回大会（2004年度）について

長崎の活水女子大学を会場として開催する予定であることが報告され、了承された。

5. 理事会開催スケジュールについて

理事会は年3回、5月、7月、10月を目処として開催することになった。10月は、顧問、監事を含めた拡大理事会とする。

6. 絵本学会のあり方について

絵本学会のあり方の基本、重点目標として、以下の3点を確認した。

- 1) 学術団体であることを中核とした上でさらなる広がりを追求する。学術団体登録をめざす。
- 2) 他の団体、組織、学会等との連携をはかる。
- 3) 広く絵本に関わる人々の共同、交流、連帯を進める。

7. その他

・次回フォーラムが8月23日世田谷文学館で開催されることが報告され了承された。

・次号ニュースの内容として、新会長挨拶、6回大会報告などを掲載することが了承された。

・役員の参加するメーリングリストを設置する方向で検討することになった。

●事務局が替わりました

6月の第6回大会以降、事務局が替わりました。新事務局の連絡先は下の通りです。どうぞよろしく。

■絵本学会事務局

〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学芸術学系 笹本純研究室内

Fax.029-853-2846

mail : jsamt@geijutsu.tsukuba.ac.jp

郵便振替 : 00130-7-407174 絵本学会

なお学会サイトは、これまで通り武蔵野美術大学で運営して頂きます。URLも変りません。

<http://ehongaku.musabi.ac.jp>

◎ニュースの発行も新事務局中心で行います。そのため紙面の体裁がこれまでとやや変わりました。通常この時期のニュースの発行は8月下旬ですが、諸事情により1月ほど遅れましたことをお詫びいたします。